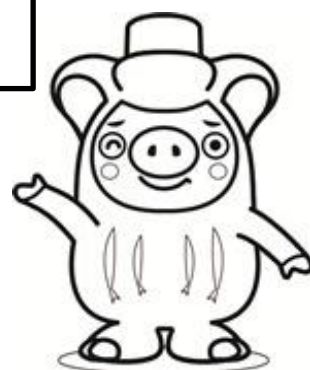


第 25 回

さんりく・おおふなと

お話大賞作品集

大船渡市立中央公民館



はじめに

この「さんりく・おおふなとお話大賞」には、ふるさと大船渡を舞台とした夢の世界が二十六点掲載されています。今年度も、小中学生・一般の方からご応募いただき、このような素晴らしい作品集を発刊できたことを嬉しく思います。

ふるさとの自然を感じ想像したこと、考えたことを言葉にし、文章にまとめることは、簡単なことではありません。でもそれはとても楽しいことです。自分で想像したお話を作り上げること、豊かな人間性や想像力、そして考える力を、楽しみながら伸ばしてほしいと思います。

また、今回の作品にも東日本大震災を題材にしたお話が多数ありました。これは、震災の記憶を風化させることなく後世に伝えたいという願いと、希望ある未来へと進むふるさと大船渡の自然と文化を大切にしていきたいと思う皆さんの心の表れでしょう。

保護者そして市民の皆さんが、この作品集に描かれている子どもたちのお話を読んで夢や希望、あこがれと一緒に味わい楽しんでいただければ幸いです。

結びに、この作品集の発刊にあたり、ご指導、ご協力をいただきました学校関係者や多くの方々、そして審査員のみなさまに厚く御礼申し上げます。

講 評

さんりく・おおふなどお話大賞審査委員長

熊 谷 勳

「さんりくお話大賞」から数えて、「さんりく・おおふなどお話大賞」は今年で二十五回目を迎えました。

この長い二十五年の間に一七〇四点の応募があり、三〇四点も入賞している価値のあるものになりました。

今年度は市内の小・中学生から一般まで二十六点と昨年より少ない応募になりましたが、一生懸命お話作りに挑戦してくださった方々に深く感謝を申し上げます。ただ、高校生の応募がなかったことがとても残念でした。

今年度の作品で特徴的なことは、小学生の高学年以上に津波に関する内容が多かったことです。それは、全体の半数を占めました。その作品も、以前までは悲しく辛い話題が多かったのですが、海と正面から向き合って生きていこうとするものや復興を内容にしたものなど、前向きで明るいものに変わってきました。

さて、審査に当たりましては、①テーマが独創的で発想が豊かであるか。②初め・中・終わりなどの構成が工夫されているか。③読み手に分かりやすく目に浮かぶような書き方になっているか。④大船渡の郷土に

対する理解や愛情が感じられる作品か。⑤総合的に見て素晴らしい作品であるか。の五つの観点で、四名の審査員が行いました。

その結果、いずれの作品も郷土への愛情や理解が感じられ、発想豊かで想像力や説得力があり、甲乙つけがたいレベルの高い作品ばかりで、審査員を悩ませることになりました。

入賞されました八名の皆さん、大変おめでとうございます。その中でも、昨年度に引き続き小学生高学年から「大賞」が生まれましたことをうれしく思います。

また、今年度は、中央公民館主管の「はじめてのお話づくり講座」集まれ未来の童話作家」の受講生も応募し、内容の深いものになりました。

来年度は、「話し言葉」と「書き言葉」の違いに注意し、「現実的な内容」から「夢や創造性のある内容」に移行できるよう期待しています。

☆大賞

◇越喜来小学校五年 田端 里帆さんの

「きつねの神様」

まるで、今から一六〇年程前の和歌山県に伝わる安政南海地震の浜口梧陵「稲むらの火」を思い出させる

ような作品です。村人達が助けられたお礼にお供え物をする感謝の心で結んだストーリーは、忘れられていた気持ちが戻ってきたようなほのぼのとした作品になっています。

初め、中、終わりなどを考えた構成も工夫され、表現の仕方も分かりやすく簡潔で、会話文に方言を用いた技法も読み手を引きずり込んでいます。

「杉の木の神様であるきつね」に、村人の命が津波から救われ、主人公に対しては妹や弟のかけがえのない存在についても教えられました。人間として最も大切なことを学ぶ題材として、大変素晴らしい作品でした。

☆小学生低学年の部へ奨励賞

◇吉浜小学校二年 菊地 毅さんの

「たけし一ざ よしはまのたび」

主題が独創的で夢のある発想に惹かれ、題名からどんな物語が飛び出て来るのかわくわくしながら読みました。郷土色豊かな海の幸を季節ごとの応援歌にし、それをリズム感溢れる短い文章ですっきりとまとめてくれました。また、繰り返し掛け声も効果的でした。たけし座長と男の子が一緒になって踊っている姿が、目に浮かぶようです。吉浜に対する強い愛情が、文章

全体にとってもよく出ていました。次の町である越喜来や綾里の旅も期待しています。

◇綾里小学校二年 岩渕 眞歩さんの

「美里ちゃんの入學式」

まず、二年生でありながら、とても長い文章に挑戦したことに関心しました。八人のコックさんである春の精や夏の精などの発想が豊かで、ハルルンやサニーなどの名前もユニークに登場し、楽しいパーティーにリズム感を与えています。コックさんの持ってきた食材が、郷土である綾里の海の幸や山の幸とマッチしています。

「しどろもどろ」や「みちびかれるように」など、表現力の高さにも驚きました。

短くまとめることにも挑戦してみてください。

☆小学生高学年の部へ奨励賞

◇越喜来小学校六年 熊谷 恒汰さんの

「漁師をめざす太郎の夢」

太郎の夢が次々に膨らんで、内容がテーマと一致しています。漁師の魅力については、「自然の中で豊かな恵みを実感しながら仕事ができる最高の仕事」と位置づけ、海の豊かさやきれいさにも触れ、郷土への理

解が郷土愛にまで発展している作品です。海産物の試食や漁業の良さを伝える講演会、会社経営など、アイディア溢れる内容です。漁師体験を積み重ねながら体力づくりや天気の予測など、具体的な目標が一段とたくましい海の男に結びついています。

◇盛小学校五年 畠山 公さんの

「今日もイエスタデイが聞こえる」

さびしさが漂うメロディ「イエスタデイ」には「母親を病気で失った悲しみ」が込められている。それが、震災と重なる。そのことを思い出させる曲を流し続けるのは、「一刻も早く元の大船渡に戻す」ことである。生きていくためには、悲しみを受け止め、運命を受け入れることである。そのためには、変えないことも大切である。という高度な文章構成、表現力、独創的な主題など、どれをとっても素晴らしい作品です。次回は創作童話にも挑戦してみてください。

☆中学生の部へ奨励賞◇

◇日頃市中学校三年 新沼 大和さんの

「二つの海と海と」

大震災の海と主人公の名前を結びつけた主題が、豊かな発想で独創性のある作品にしています。また、導

入の部分で用いた倒置法的技法の「あの日までは」や「四年前のあれ」なども作品全体にアクセントとして生かされています。大津波の映像から強い恐怖や衝撃を受けながらも、「この海と共に生きるぞ」と震災に真正面から向き合っているという姿勢が、強い郷土愛に結びついています。

◇日頃市中学校二年 紺野 伊歩希さんの

「私の手をひいて」

冒頭の故郷紹介や中学校生活初日の様子は、感性豊かな書き出しで中学生とは思われない素晴らしい文章です。また、「鼻腔」や「臆す」など語彙が豊富で、「地球が私達を裏切った」「音のない言葉を発し続け」などの表現力にも大変優れた作品です。難しくなりますが、「私は私。あなたは私。私はあなた。」のように、過去の「私」に問いかけて自分の感情や行動を確認する書き方は、太宰治を思い出させるようで作品の中に引き込まれてしまいました。

☆一般の部へ奨励賞◇

◇中村 祥子さんの

「オフーと気仙丸」

「海はかがみのようです」や「町や山も宝石のよう

にキラキラと光っています」など、読み手に分かりやすく表現が工夫され、情景が目に浮かぶような素晴らしい作品です。導入、展開、終末などの構成も工夫され、子供向けの絵本作りとして大事なお手本になります。ウミネコのオフーと「霜」との出会いや「小魚や貝の食べ方」などを通し、若鳥の未熟さや幼稚さの表現の仕方にうまさを感じます。また、「ユウレイ船」が「気仙丸」に変身したことや、津波に耐えた「気仙丸」の復活も、子ども達から大きな拍手をもらうこと間違いなしです。

目次

発刊の言葉

大船渡市教育委員会教育長

今野 洋二

講評

さんりく・おおふなとお話大賞審査委員長

熊谷 勵

大賞

きつねの神様

越喜来小学校 五年 田端里帆…… 1

奨励賞

【小学生低学年部門】

たけしーざ よしはまのたび

吉浜小学校 二年 菊地 毅…… 3

美里ちゃんの入学式

綾里小学校 二年 岩 渕 眞 歩…… 5

【小学生高学年部門】

漁師をめざす太郎の夢

越喜来小学校 六年 熊谷 恒 汰…… 8

今日もイエスタデイが聞こえる

盛 小 学 校 五年 畠 山 公…… 11

【中学生部門】

二つの海と海と

日頃市中学校 三年 新 沼 大 和…… 13

私の手をひいて

日頃市中学校 二年 紺 野 伊 歩 希…… 17

【一般部門】

オフーと気仙丸

中 村 祥 子…… 21

☆ 作 品 集 ☆

《小学生低学年部門》

三人兄弟のぼうけん
スネカのものがたり
なおとのぼうけん
みらいへの三てつれつ車
よしはまのふしぎなしぜん

猪川小学校	二年	千葉	妃奈多……	27
吉浜小学校	二年	吉田	風沙……	29
吉浜小学校	二年	田中	莞奈……	31
吉浜小学校	二年	中井	たまえ……	32
吉浜小学校	二年	中井	真央……	33

《小学生高学年部門》

海くん
海の中の物語
宝さがし
ゆりかちゃんとつばさくんとたぬきの物語
ケンタとゲンの大ぼう険
まほうの言葉
大好きな大船渡

大船渡小学校	四年	村上	冴凜……	35
越喜来小学校	四年	田中	聖大……	36
越喜来小学校	四年	遠藤	玲奈……	39
越喜来小学校	四年	岡澤	璃和……	42
越喜来小学校	六年	窪田	藍子……	45
末崎小学校	六年	宮崎	倫……	49
末崎小学校	六年	小松	真菜……	52

《中学生部門》

消えない涙

復興への架け橋

みんなの願

希望の花

未来の日頃市

母の笑顔を忘れない

大船渡第一中学校 一年 新沼由唯…… 54

日頃市中学校 一年 鈴木花琳…… 59

日頃市中学校 二年 鈴木裕也…… 63

日頃市中学校 二年 村上未来…… 65

日頃市中学校 二年 三条琉月…… 69

日頃市中学校 二年 工藤美結…… 70

大賞

きつねの神様

越喜来小学校六年 田端 里帆

昔々、大きな杉の木がそびえ立つ、「オキライ」という小さな村がありました。「オキライ」の村は、自然は豊かでしたが、貧しいくらしをしている人が多く住んでいました。そこにそびえ立つ、大きな杉の木は、小さな子ども達二十人位が輪になって手をつないだ位の大きさでした。

その村には、とっても貧しい家でくらすかわいい女の子がいました。その女の子には、妹と弟がいました。父さんや母さんは、貧しいくらしでも生きて行けるようにと、毎日一生懸命働いていました。なので、妹と弟の事は、全部女の子がやらなくてはなりませんでした。女の子は、いつも大きな杉の木の所へ妹と弟を連れて行って、遊ばせていました。妹と弟はとても楽しそうに、「ワーワー」と楽しそうに遊んでいましたが、

女の子は、いつも妹と弟のめんどろを見ていたので、村の子達と遊ぶ事はありませんでした。女の子は友達と仲よく遊ぶ子達がとてもうらやましかったのです。ある日、女の子は、母さんと父さんに「新しい着物がほしい」と物ねだりをしました。すると、母さんに、「こんな大変な時に、何ばかげた事言ってるの。妹と弟もガマンしているのに、あんたは、がまん出来ないのかい？頭をしっかり冷やして来なさい。」と言われてしまいました。仕方なく、女の子は、いつも来ている杉の木の所へ行きました。女の子は、妹や弟がいて、何もかもがまんしなくてはならない事にはらが立って、

「妹、弟なんか知らない。どこかに消えてしまえ。」と杉の木に向かってさげびました。女の子はつかれて、その場でねてしまいました。すると、何か白くて大きな物が女の子を家まで連れて行きました。その白くて大きな物が何かは分かりません。女の子が目覚めると、家の中にいました。杉の木の下に行った所までは覚えていた女の子でしたが、いつの間にか家にいるので、どうして家の中にいるのだろうと不思議に思いました。着物は妹や弟もがまんしているんだと思い、あきらめ

ることにしました。

妹や弟のめんどろをみるのはいやだなと思いつながら、母さんや父さんを助けなければならぬので、女の子は、いつものように、大きな杉の木の下の所へ連れて行って妹と弟を遊ばせていました。女の子は、杉の木を見上げながら、この杉の木の下からどうやって家に帰ったのかと不思議に思っていました。

何日かたったある日の朝のことです。めずらしく、海の水が引いていました。こんなに水が引くことはめったにないので、村の人は、たくさん貝や海藻などの食物を採ろうと、海岸はにぎわっていました。女の子も妹達を連れ、母さん達と海岸へ行きました。女の子は、妹達をほったらかして、夢中になって貝や海藻を採っていました。すると、とつぜん、

「こわいよ！ 助けてよー。」

とさけぶ声がしました。ふり返って見ると、大きくて白い体のきつねが妹と弟を軽くくわえてどこかへ連れ去っていく所でした。

村の女達が、

「子どもがでつけないきつねさ、さらわれた。」

「なにっ、さらわれた。」

「そりゃ、大変だ。」

「でつけないきつね？。」

「白がったけんど、たしかにきつねだったな。」

「どこのきつねだ。」

など、あちこちから聞こえてきました。

「助けさ行くべ。」

「んだ、んだ。助けさ行くべ。」

「どっちの方さ行った？」

「あっちの方だな。」

と大きな杉の木のある方を指さした村人がいました。

「早く行くべ。」

「待ってけろ。」

村人はそんな声をかけ合いながらきつねを追いかけてきました。

きつねは、杉の木の下の所まで来ると、妹と弟をゆつくりと置いて、村人に気付かれないように、素早く杉の木のほら穴に入っていきました。

きつねを追いかけて行くと、村人、母さん父さん、女の子はあの大杉の木の下にきていました。杉の木に守られるようにちよこんとすわっている妹と弟を見て、母さん、父さん、女の子、村人達は、妹達が無事でよかったと安心しました。

みんなが、ずっと走って息が切れそうな体を休ませていた時でした。

「ザザザザー」

とみような音がしました。今までの聞いたこともないような音でした。何の音だろうとみんなは辺りをきよろきよろと見ていました。村人の一人が海の方を指さして、

「つなみだあー」

と、さけびました。海の方から、黒い波『津波』が村を次々と飲み込んでいくではありませんか。みんな声をだすこともできず、ただ立っているのが精いっぱいでした。

村はなくなってしまうましたが、村人は誰も飲み込まれることはありませんでした。

「子どもをさらっていったあのきつねがいなだったら、おれらは、とつくの昔に死んでだな。」

「きつねのごど、おっかけてきていがったな。」

「村はなくなってしまったけど、この命、きつねに助けられだな。」

と、村人達が話していると、急に、杉の木が風も無いのに、

「ザワザワザワザワザ、ザワザワザワザ。」

となり出しました。村人はちよっとドキッとなりました。すると、女の子の妹が、

「さつき、私のことくわえてきたきつね、あの杉の

木の穴に入っていたよ。」

と、言いました。村人達は顔を見合わせました。「あのきつねは、杉の木の神様だ」とみんなが感じていました。

それから、女の子は、妹や弟の大切さを知って、一生けんめいめんどろを見るようになりました。妹や弟が遊ぶのを楽しそうに見ていました。

村人達は、きつねはおれ達を見守っていてくれたんだとありがたく思い、いつも、杉の木にお供え物をするようになりました。

奨励賞

【小学生低学年部門】

たけし一ざ よしはまのたび

吉浜小学校二年 きく地 たけし

むかしむかし、あるところに、たけし一ざというチンドンやがいました。一ざは、人びとをえがおにしようとして、ぜん国かく地をたびしていました。

ある日、一ざがよしはまをたびしていると小さな男の子に出会いました。その男の子は聞いていました。どうしてないているのかと聞くと、男の子は、

「よしはまの海のさちをもつといっぱい知ってもらうには、どうしたらいいのか、わからないのー。」

と答えました。それを聞いた一ざ。男の子を元気にしてあげたいと思いました。そして、みんなでそうだんをして、「よしはま・海のさちおうえん歌」を作ることになりました。

まず、はじめにサックスのつばさくんが、

「春はワカメに五月ホヤ、ソレ、五月ホヤ。」

と歌い出しました。

「元気出して元気出して。ランランラン。」

とほかのみんなもえんそうしはじめました。

夏はウニどん やきホタテ

ソレ やきホタテ

あきはサンマに サケ イクラ

ソレ サケ イクラ

ふゆはカキなべ ドンコじる

ソレ ドンコじる

しやくなげおんせん 五よう山

元気出して さあ 元気出して

チャンチャン

ハアー ヨイサヨイサ

それを聞いた男の子は、目になみだが出ていたけれど、だんだんにつこりえがおになってきました。

さあ、あとひといきです。まい手のひゆうまくんがせんすをバツと広げてふりはじめました。せんすのうらには「がんばれ」と大きく書いてあります。たけしざ長は、男の子と手をつないでいっしょにおどりだしました。

ソレ ヨーイサヨイサ、チャンチャン

ソレ ヨーイサヨイサ、チャンチャン

みんなではずむようにおどりました。すると、とらまいははまつてきました。お手つだいのだまえちゃんも、ピンクのせんすを持ってふりはじめました。

ソレ ヨーイサヨイサ、チャンチャン

ソレ ヨーイサヨイサ、チャンチャン

そして、たけしざ長が、

「チンドンや、見ていかなきやいみがない。よしはまの海のさちをあじわわないといみがない。なやんでいたら、だれかに持っていけるよ。」

と歌ってえんそうがおわりました。男の子は

「元気になったよ。これなら、よしはまの海のさちを知ってもらえそう。たけし一ざ、ありがとう。」

とうれしそうに言いました。

そして、一ざが作ったおうえん歌のおかげで、よし
はまは海のさちで、ゆう名になったそうです。

一ざのたびは、まだまだつづきます。つぎはどんな
人に会えるのかな。

美里ちゃんの入学式

綾里小学校二年 岩渕 眞歩

あすは、綾里小学校の入学しきです。綾ちゃんと海
くんは、一つ上の学年になります。綾ちゃんは五年生。
海くんは三年生です。そしてあすは、二人の妹の美里
ちゃんが入学してきます。これで三きようだい全いん
綾里小学校のじどうになります。

五・六年生は、入学しきで校歌を歌います。だから、
綾ちゃんはれんしゅうに行きました。

海くんは、まだ春休みです。そこで、お母さんとお
いまいのごちそう作りのお手つだいをすることにしま
した。

海くんとお母さんがどんなごちそうを作るか考えて
いると、とつぜんドアの方からトントンというノック
の音が聞こえました。

お母さんが、

「だれかしら？」

と言ってドアをあけると、そこには、なんと真っ白な

羽のついたようせいのようなかつこうをした女の子が
いました。お母さんと海くんは、びっくりしてきよと
んとなつてしまいました。

「こんにちは。わたしは、おりようりの国のせいです。

パトロールのとちゅうで、人間の世かいにまよいこん
じやったんです。そしたら、この家から女の子が、学
校に行くすがたをみちやっただんです。そして、あすは
入学しきだとわかりました。それで、あなたの家に来
たら、そうだん話が聞こえたんです。わたしがなにか
やくにたつと思つたのでおじやしました。」

そこで、お母さんはとにかく中へ入れていすにすわ
せました。

「ぼくたちのなやみは、あした妹の美里が入学して
くるからごちそうを作ろうと思つただけど、ふつうの
おりよりだったたら、ちよつとおもしろくないので、
お母さんとそうだんしていたんだ。」

と、海くんが言うと、女の子は、

「わたしがなんとかしてあげます。」

と言って、まほうのステッキをふりあげると、くるく
るつとまわしました。

海くんとお母さんは、女の子が何をするのかぼーっ
として見ていました。すると、ピカーッと光がとおく
の方にあらわれ、みちびかれるようにとりのようなも

のがとんできました。そして、ドアがノックされました。

「あら、ようやくきたみたいね…。」

と女の子が言いました。

「え、だれが。」

と海くんが言いました。すると、女の子は、

「見ればわかるよ。」

と言いました。

海くんがそーっとげんかんの外をのぞいてみると、色ちがいのふくをきて、女の子のように白い羽のついた八人の人たちがいました。

海くんはびっくりして、しりもちをついちやいました。

「だれ？」

とお母さんが言いながらドアをあけました。お母さんも、八人の人たちを見てびっくりしました。

「この人たちは、おりようりの国のコックさんです。わたしがよびました。この人たちがおりようりをおしえてくれます。」

と女の子は言いました。お母さんは、八人のコックさんたちに、

「ど、どうぞ。中に入ってください。」

と言いました。コックさんたちは、おじぎをして中へ

入りました。

「きみたちの名前は何というの？」

と海くんが聞きました。

「わたしは、ハルルン。春のせいよ。」

「おれ、サニー。夏のせいだ。」

「あたしは、モミジ。あきのせいだよ。」

「ぼ、ぼくは、サム…。ふゆのせいです。」

「おれはキグリン。山のせいだぜ。」

「わたしはリンです。川のせいです。」

「ぼくはウェーヴ。海のせいだ。」

「わたしはスカイです。空のせいです。」

そして、あいさつがすんだコックさんたちは、お母さんと海くんといっしょにおいおいのごちそうを作ることになりました。

「ところで、あなたたちは、何人きょうだいですか。」とコックさんたちが言うと、

「ぼくたち、三人きょうだいです。ぼくは、海といって、綾里は海の町だから、こういう名になりました。おねえちゃんの名前は綾といって、綾里の綾は、あやともいうのでこういう名前です。そして、あす入学してくる美里は、一ばんすえっこです。」

と海くんが言うと、コックさんたちは、

「お父さんとお母さんはこの町が大好きなんだね。」

と言うと、お母さんはてれちゃって、かおが真っ赤になってしまいました。

そこで、コックさんたちは、岩手にちなんだおりょうりを作ることにきめました。

「家には、どのきせつのおりょうりがありますか？」
とうせいの女の子が言うと、

「今のきせつのしよくざいがあります。」
とお母さんが言いました。

「このコックさんたちは、自分の名前にちなんだ国へ行っていろいろなしよくざいをもってきてくれますよ。」
と女の子が言いました。

「それじゃあ…。おねがいしようかしら…。」とお母さんがしどろもどろになりながら言いました。

そこで、女の子は、まほうのステッキをクルクルと回しました。すると、にじ色の道ができました。コックさんたちは、じゅんばんに道へ入っていくと、たちまち道は見えなくなりました。

コックさんたちは、自分の名前にちなんだふしぎな国へ来ています。空のせいのかいのは、ふしぎな太ようがあります。スカイが太ようをまほうで火にかえると、ごちそうがあつというまにできあがつてしまいます。この太ようの火さえあれば、火をつかつて作るおりょうりが時間をかけずに作ることができます。

「そろそろ時間だわ。」

と女の子が言いました。そして、さつきとはんたいの方こうにまほうのステッキを回すと、道ができました。そして、コックさんたちは、いろいろなざいりょうをもつて、じゅんばんにならんでもどつてきました。

コックさんたちがもつてきたざいりょうは、ほたて、わかめ、めかぶ、ムール貝、さんま、いか、うに、あわび、さけ、いくら、どんこ、マンボウ、きのこ、山さい、たけのこ、木のみ、たくさんのやさいやくだものなどなど。コックさんたちがもつてきたざいりょうで、だいどころ中いっぱいになりました。

「こんなにいっぱいのものでわたし、何を作っているのかわからない。」

とお母さんが言いました。

「この太ようの火さえあれば、ごちそうがあつという事です。」

とスカイが言いました。そして、コックさんたちは、あつというまにごちそうを作ってしまった。そして、コックさんたちは、いろいろなきせつの花からとつたはちみつももつてきました。このはちみつとみそをまぜて作った、とくせいディップをつけると、なんでもとつてもおいしくなります。

ごちそうがいっぱいになったから、

「こんなにいっぱいのごちそうのおかげでれいぞうこに入らないし、それに、ないしよで作ったごちそうがばれちゃうわ。」

とお母さんが言うと、女の子は、

「ごちそうごちそう小さくなあれ。」

と言いました。そしたら、ごちそうは小さくなりました。そして、お母さんはれいぞうこに入れました。小さくなったらぜんぶびったりでした。そして、コックさんたちは、おわかれのあいさつをして帰っていきました。

そしてつぎの日。

今日は、四月一日。綾里小学校の入学しきです。綾ちゃんと海くんの家では、入学しきのじゅんぴで大きいそがしです。おじいちゃんおばあちゃんもやってきました。おばあちゃん、美里ちゃんにきものとはかまをきせてくれました。かみは、いとこのおねえさんがゆってくれました。美里ちゃんのあたまのうしろに、大きなピンクのリボンをつけてくれました。

おじいちゃんは、美里ちゃんのきものすがたを見ると、

「美里は何をきてもかわいいなあ。」
と言いました。

みんなは、綾里小学校の入学しきへ行って、海くんだけがるすばんになりました。

そこへ、女の子がまたあらわれました。海くんがれいぞうこからごちそうを出すと、女の子は、

「ごちそうごちそうもともどれ。」

と言うと、ごちそうは、もとにもどりました。

入学しきがおわって、美里ちゃんたちが帰ってくると、おいわいのじゅんぴはすっかりできあがっていました。そこで、みんなはいっせいに、

「入学おめでとう。」

と言いました。

とてもすてきなパーティーになりました。

おわり

奨励賞

【小学生高学年部門】

漁師をめざす太郎の夢

越喜来小学校六年 熊谷 恒汰

ここは海の町、越喜来。ここで、ある男の子が生まれた。名前は太郎。じいちゃんと父ちゃんは漁師をし

ている。

太郎の将来の夢は、漁師だ。最初は興味をもたなかったが、二人の働く姿を見て漁師に憧れた。船の上で力強く漁をする。釣り上げた魚を、その場でえらを切って血ぬきをする。そんな姿がとてもかっこいいと思ったのだ。保育所時代にホタテの耳吊りデビューを果たし、小学校一年生で船釣りデビューを果たした。

いつ、太郎が将来の夢を漁師にしたかというところ、一年生の時だ。「文集おおふなと」に海の男になると書いた。自分で決めた。じいちゃんの跡を継ぎたいと、本気で思ったのだ。その気持ちは、六年生になった今でも、変わらない。

しかし、小学校一年生の終わりに、東日本大震災におそわれ、太郎の家では船も流され地域の漁業は大きな被害をこうむった。太郎は、越喜来の海はどうなってしまうのだろうと心配になった。夢をあきらめようかと考える日々だった。

ところが、震災三日目に、太郎の家の船が見つかったという知らせがきた。地元の人が崎浜の明神様の前の浜で見つけてくれたのだ。じいちゃんが陸まわりで取りに行ってきた。家族全員が喜んだ。じいちゃんは、あきらめていたから、船が戻って来てくれて本当に喜んだ。ばあちゃんも、船の神様が船を守ってくれたと

言っていた。太郎は、この船でまた釣りや海の仕事を手伝えると、うれしくなった。

太郎の通う学校も、近くの学校と統合した。

同級生も一人から十八人に増えた。十九人での新しい学校生活が始まり、家にも小さな命が生まれた。かわいい、かわいい妹だ。太郎はぼくもお兄ちゃんになるのだという気持ちで、毎日が楽しくわくわくでいっぱいだった。

太郎は、二年生でウニ漁デビュー、三年生で網おこしデビュー、四年生であわび漁デビュー、五年生でワカメ・メカブかりデビューと、次々と漁師体験を積み上げていった。

しかし、太郎は朝早く起きるのが苦手で、いつもなかなか起きることができなかった。漁に行くには、早いときは四時か四時半に起きなくてはならない。目覚ましで起きることができないときは、ばあちゃんに声をかけられて、目をこすりこすり、やっと起きるのだった。でも、太郎は漁師になるには仕方ないかと思っただ。起きるのはつらいが、漁に行くのはとても楽しかったからだ。船で海の上を走る気持ちよさや、ひらめが釣れた時のうれしさは格別で、心がおどれるのだった。

太郎は、漁師の魅力を、みんなに広めていきたいと

考えている。三陸町に住んでいるみんなに広めていきたいと思っている。なぜなら、太郎のクラスで漁師になりたいという人が、太郎の他にはいないからだ。たぶん、他のクラスでもそうだろう。若い人で漁師をめざす人が少ないのが、とても残念だと太郎は思う。漁師の後継者がいないことが、とてもさびしい。どうしたら後継者が増えてくれるのかと思う。

例えば、海産物の料理を試食してもらい、海の恵みを実感してもらうというのはどうだろう。ホタテのさしみや焼きホタテのおいしさを、ぜひみんなに伝えたいと思う。ワカメをゆでるときれいな緑色になり、歯ごたえもあっておいしいことを、みんなは知っているだろうか。

また、漁の体験をしてもらい、越喜来の海の豊かさやきれいさを感じてもらいたいと思う。

自然の中で、豊かな恵みを実感しながら仕事できるなんて、最高の仕事ではないかと太郎は思うのだ。おいしい魚をとって、みんなに喜んでもらえるのは、とてもうれしいことだ。つらい仕事もあるが、努力次第で魚がたくさんとれることも魅力だと思う。会社で働くこととはちがう魅力があると思うのだ。それをアピールしたいと思う。

それらの漁業のよさを伝える講演会もやってみたい

と太郎は思う。食にかかわることは、人間が生きていく上でとても大切なことだ。生きていく上で、なくてはならない漁業の魅力をぜひたくさんの人に知ってほしいと考えている。それをきっかけに、たくさんの人が漁業に取り組んでくれたらいいと思うのだった。

太郎の夢はさらにふくらんでいる。漁業の会社を作って、船も買い、全国に支所を置きたい。太郎は社長だ。海の男でもあり、社長でもある。太郎は、今日も、越喜来の海をみて、大きな夢を抱いている。

太郎は柔道も四年生から始めた。体をきたえるためにもよいスポーツだが、漁師に必要な力をつけるにもってこいのスポーツだと思った。初めはなかなか勝てなかったが、六年生になってからは、少しずつ勝てるようになってきてうれしい。六年生になってからは柔道や勉強で忙しく、最近は一回も漁に行っていない。でも、必ず、中学校へ行ったら、絶対に漁に行きたい。いや、行きたいではなく、行くんだ。絶対漁に行くんだと太郎は思う。

太郎はがんばる。たくましい海の男になるために。体力作りも勉強もそのための第一歩だ。船の運転も機械の操作も、海の地形にも詳しくなり、天気の前測もできるようにがんばるのが、今の太郎の目標なのだ。

今日もイエスタデイが聞こえる

盛小学校五年 畠山 公

午後五時。今日もいつものように、さびしさを感じるメロディが空に流れる。大船渡では一日に三回、防災無線のメロディが流れることになっている。午前七時に「エーデルワイス」正午に「野ばら」そして、午後五時に流れるのが「イエスタデイ」だ。

この「イエスタデイ」が聞こえてくると、ぼくは何とも言えないさびしい気持ちになってくる。今日という日が終わってしまう。楽しかった時は楽しいなりに、物足りなかった時は物足りないなりに、どうして時間は止まってくれないのだろうか。明日は今日より良い日になってくれるのだろうか。もう戻ってこない時を惜しむようなメロディだ。

この曲が「イエスタデイ」という曲だと教えてくれたのはお父さんだ。僕は四年生の時に、お父さんの実家のある大船渡に引っ越してきた。それまで住んでいた花巻でも同じように防災無線のメロディが節目の時間に流れてきた。違っていたのは、花巻では宮澤賢治の詩にちなんだ曲が流れていたことだ。もちろん、それまでもぼくは大船渡には何度も来ていて、イエスタデイだって聞いたことはあるはずだけど、意識したの

は引っ越してきてから何日もたってからだった。「エーデルワイス」や「野ばら」は何となく知っていたけれど、午後五時に流れてくる曲は知らなかった。なんという曲かを聞いた時、お父さんが教えてくれた。

『「イエスタデイ」これはビートルズというイギリスの伝説的なバンドの曲なんだ。中でも特に有名な曲の一つだよ。でもね……』

実はお父さんも、初めて「イエスタデイ」が防災無線で流れた時にはこの曲は知らなかったらしい。「エーデルワイス」「野ばら」「イエスタデイ」が流れ始めたのは平成二年、父は中学生だった。ビートルズというバンドが活躍したのはお父さんが生まれるよりるか前のことらしい。

「でも、大人になってからビートルズのファンになる人も多いよ。お父さんも結構CDを聴いているよ。」

お父さんはそう言ってCDで「イエスタデイ」を聞かせてくれた。

Yesterday,

All my troubles seemed so far away

Now it looks as though they're here to stay

oh, I believe in yesterday

分かるのは最初と最後の「イエスタデイ」だけだ。

お父さんも実はよく分からないらしい。というわけでお父さんと一緒に調べてみると色々なことが分かった。「昨日まではこんな不幸なんて考えられなかったのに、今はもうどうしようもない。昨日のままだったらとどんなに望んでいるだろう。」

だいたいこんな意味らしい。

そして、多くの人に長らく失恋の悲しみを歌っていたと思われるらしい。だけど、本当はこの曲を作ったポール・マッカートニーが母を病気で失った悲しみをつづったものだということが分かった。

どうしてこの曲が防災無線のメロディになったのだろう。この疑問から始まり、いくつもの疑問が数珠つなぎの様に僕の頭に浮かんできた。お父さんに聞いても分からないし、インターネットで調べても分からなかった。そこで思いきって大船渡市役所総務課防災管理室の方に直接聞いてみることにした。すると、いろいろなことが分かってきた。

防災無線の曲を誰がどんな理由で決めたかは記録が残っていないということ。機械を作った会社の曲の中にあつたものの中から選んだということ。防災無線がいざというときにきちんと機能するために決まった時間に一日三回時報を流すことでチェックしていること。

つまり、この時報のメロディは原則として毎日流れるらしい。それを聞いた時、僕は勇気を出して質問した。あの日、大船渡にいなかった僕にはわからないことだ。

「震災の時にも流れたのですか。」

答えは「流れなかった」ということだ。それどころか、復旧には半年ほど時間がかかり、しかも正確な復旧の日時は記録されていない。それほどまでに大船渡が震災で受けた被害は大きく、復旧は困難を極め、それに関わる皆さんの毎日が必死だったということだ。

それから防災管理室の方は、僕に大船渡の防災の仕組みを特別に教えてくれた。その話を聞いて感じたことがある。それは、その仕組みを維持し、復旧するためにどんなに大変な思いで、使命感をもって取り組んできたかということ。そして、もしまだ災害が大船渡をおそったとしても、絶対に守って見せるという強い意志だ。

「一刻も早く、もとの大船渡に戻す。」

その気持ちが強くと伝わったから、僕は一番質問したかったことをあえてしなかった。そして、自分で考えることにした。

「なぜ震災後も『イエスタデイ』を流すことにしたのですか。」

昨日まで思いもしなかった不幸。もう一度昨日に戻れるなら。最愛の人を失った悲しさ。その歌詞の意味は、すっかり震災と重なる。あれほど有名な曲だったら、歌詞の意味を知っている人も多いだろうし、メロディを聴くだけで口ずさめる人も多いだろう。そして、その人たちの中には大事な人を失った人もいる。それを思い出させる曲を使い続けるのはなぜだろうか。

その答えはもう分かっている。大船渡にいて、大船渡を守ってきた人々が何よりも望んでいるのは「もとの大船渡に戻す」ことだ。もとの生活、もとの笑顔、そこにはもとの時報、もとの「イエスタデイ」がある。

もとの大船渡と違うのは、「イエスタデイ」を聞くたびに悲しいことを思い出す人がいるということだ。しかし、僕は思う。

人は悲しみを受け止めて明日を迎える。忘れることなく運命をうけいれる。そのためには変えないことも大切なかもしれない。

今日も午後五時。イエスタデイが聞こえる。そして僕はともに大船渡で暮らす一人として変わらない昨日を望む気持ちを分かち合う。

終わり

*この作品を仕上げるにあたりご協力いただきました大船渡市役所総務課防災管理室の佐々木さんに感謝い

たします。

奨励賞

【中学生部門】

二つの海 カイ うみ
海と海

日頃市中学校三年 新沼 大和

僕は海（カイ）。大船渡市に住んでいる。海とのつながりが深い町ならではの名前だ。もちろん海は好きで、泳ぐだけではなく、釣りをしたり、景色を楽しんだりもした。——「あの日」までは。

二〇一一年三月十一日。東日本大震災が発生し、大船渡市は甚大な被害を受けた。当時まだ小学生だった僕も、突如小学校を襲った激しい揺れにとっても驚いた。幸い、当時通っていた長安寺小学校は比較的内地にあり、自宅も日頃市町内だったため、被害はなかった。あれから約四年。大船渡市からがれきの山は消え、土地のかさ上げも進んでいる。しかし、いまだに仮設

住宅で生活している人も多く、復興にはあと何年かかるのかと正直不安になる。

長安寺中学校は全校五十人にも満たない小さな学校だ。各学年十五人前後と、他の学校のークラスにも満たない人数だ。全校生徒の名前を覚えることができ、団結力もある。また、校庭に仮設住宅がない。体育の授業や部活動を自分達の学校で行うことができ、普通の学校生活を送れることにとても感謝している。

夏休みが終わり、今日から二期が始まる。教室に入ると、あちこちから楽しそうな話し声が聞えてきた。

どうやら夏休み中の話題のようで、自分はここに行ってきた、自分はここでこんなことをした、という話がほとんどだ。その会話には加わらずに、僕は自分の席に着いた。夏休み中は特に外出はしておらず、話す内容がないからだ。カバンの中身を整理していると、近くで話をしている男子生徒の声が聞えてきた。

「この間みんな海に行ったとき、すごく楽しかったよな。」

「そうだな。機会があったら、今度はもっと多人数で行きたいよな。」

どうやら、他校の生徒も誘って、十人ほどの人数で海に行ったらしい。海に行ったという人は多いようで、「海に行った」という話がそこかしこから聞こえてく

る。そのようにして周囲の会話を聞いていると、後ろから突然声をかけられた。

「おはよう！夏休みはどうだった？」

この人一倍大きな声の主は、僕の隣の席の陸（りく）だ。少し前まで野球部に所属していて、気仙地区一の強打者として恐れられていたらしい。そのため力がとても強く、同じく野球部で体を鍛えていた僕でも、腕相撲をすると五秒ともたずに負けてしまう。気さくで、クラスの全員ととても仲が良い。

「おはよう。僕はずっと家にいたよ。」

「やつぱりな。だから他のみんなの話に入っていかないんだろう？」

「うっ……そういう陸はどうなんだよ。山でも登ってたのか？」

「残念、俺もずっと家にいたんだ。ところで、何で山なんだ？そんなふうに見えるか？」

「野球部より山岳部の方が似合ってる。」

今のは僕ではない。声がした方を陸と二人で見ると、ついさっきまで空いていたはずの僕の前の席に、いつの間にか一人の男子生徒が座っていた。

「えっ？いつの間に？」

陸が混乱している。当然だろう。僕だって驚いて声も出せないのだから。

「悪い。驚かそうと思ってな。」

男子生徒――空（そら）は、言葉とは裏腹に、とても楽しそうな口調でそう言った。

マイペースで掴みどころがなく、何を考えているか分からないところがある空だが、あまり浮いている感じはしない。手先が器用で、ちよつとした道具なら壊れても直せる。

「空は相変わらずだな。」

「そういう陸こそ。ずっと家の中にいたら、そうそう変わらないって。」

「結局、三人ともずっと家にいたんだな。」

僕がそう言うと、二人は同時にうなづいた。

当然といえば当然だろう。普通、夏に行くところといえば海だ。ところが、僕たち三人は「とある理由」によって、海に行くことができない。

「今年も、海に行けたやつは……いないか。やっぱり四年前の『あれ』を見た後だからな……。」

陸がつぶやく。

四年前の「あれ」というのは、東日本大震災のことだ。僕たち三人は、震災前から日頃市町に住んでいたため、津波の被害は受けなかったし、実際に見たわけでもない。

しかし、震災発生から少したったある日、偶然テレ

ビで目にした津波の映像に、僕は言葉を失った。普段当たり前のように目にしていた、青く、静かな海が、まるで黒い怪物のようになって暴れ狂い、建物、車、人など、目の前にあるもの全てをなぎ倒し、飲み込んでいく。「恐怖」や「戦慄」といった単語では言い表せないような感覚に襲われた。

大津波の様子は、今までに感じたことのない強い衝撃と共に、僕の脳裏に焼きついた。何かの拍子にフラッシュバックしてしまい、息が詰まるような感覚に襲われることが多くなった。夢にまで出てきて、真夜中に目が覚めてしまったことも少なくない。

これらの頻度が減ってきたころ、一度だけ海を見に行ったことがある。しかし、波の音が聞こえてきた時点で気分が悪くなり、大津波の様子が鮮明に思い出され、強い恐怖と衝撃で気を失った。

それ以来、海を見ることができなくなった。震災から四年が経過した今でも、時折フラッシュバックが起こることがある。波の音を聞いただけで気分が悪くなる。写真だけならいいのだが、実際に行くことはとてもできそうにない。さすがに海の話だけなら大丈夫だ。「海（カイ）」という名前が嫌になることもなかったが、正直実際の海は嫌いだ。見たくない。

他の二人もほとんど同じ理由らしい。気を失うほど

だったのは僕だけだ。海を見たときに気分が悪くなった経験はあるようだ。そのため、三人共ここ数年は海に行っておらず、外出する時も海の近くには行かないようにしている。

仕方ないといえば仕方ないだろう。しかし、大船渡市で生きていくのならば、必ず何らかの形で海に関わることになるだろう。今の僕たちに、それができるとはとても考えられない。このままでいいともとても思えない。

「一度、真剣に海と向き合ってみよう。」

震災から約四年、初めてそう強く感じた。

その日の夜のことだった。

僕は自分が今どこにいるのか分からなかった。おそらく高台なのだろう。遠くに海が見えた。眼下には、どこかで見たことがあるような街並みが広がっていた。

とてもいい景色だ。素直にそう思えた。

赤い屋根の隣には、大きなイチョウの木が立っている。青い屋根の下には、白い乗用車が見える。その手前の方には、一面黄金色に実った稲が、風になびいている。そして、遠くに見えたのは海。

しかし、次の瞬間、青い海はすぐさま黒い濁流となり、猛烈な勢いでこちらに迫ってくる。建物を破壊し、車を吹き飛ばし、怒り狂った怪物のように眼前の全て

を飲み込む。

全身から汗が噴き出し、心臓が激しく脈打っている。息が苦しい。夢だったと気付くのにしばらくかかった。

最近はかなり頻度も減っていただけに、恐怖で文字通り息が詰まるかと思った。しかし、大津波の直前に見た美しい景色も、どうしても忘れることができなかった。

青い海は何年も見ていないし、眼下の街並みも実際に見た記憶はない。けれど、初めて見た景色のほずなのに、なぜか懐かしいように思えた。

数日後、普段は登下校にしか使わない自転車で、僕は海を目指していた。

あれからいろいろ考えてみたが、夢で見たような景色を実際に見たいというのが今の僕の率直な思いだった。当然恐怖も感じてはいるが、これが海と向き合う一番の方法だと思った。

まだ波の音は聞こえないが、遠くに海が見えた。こうして実際に海を見たのは数年ぶりだ。また大津波の様子が浮かびかけたが、目を閉じ、大きく深呼吸をして、真っ直ぐに海を見た。

数年ぶりに見た海は、遙か遠くから見たにもかかわらず、とても美しいと思えた。そのすぐ近くには、土地のかさ上げが行われている様子も見えた。

しばらく見ているとまた気分が悪くなってきたので、もう一度目を閉じて考えてみた。

まだまだ海と向き合うには時間がかかりそうだ。けれど今日、ほんの少しだけでも海と向き合えたと思う。大きな一歩だ。

復興にあとどれくらいかかるかは分からない。でも少しずつ着実に進んでいるはずだ。そしていつか、大船渡は活気のあるまちに戻るはずだ。それまでに、一歩ずつでいい、海と向き合っていこう。

そろそろ家に帰ろうと思い、海の方を振り返った。昔の大船渡の面影はほとんど残っていない。赤い屋根も、イチヨウの木も、人が住んでいる気配は何もない。茶色の土が盛り上げてあるだけ。でも、その向こうに見える青い海は、昔の海だ。静かに、おだやかに波打っている青い海だ。夢で見た景色とは違った懐かしさを感じて、思わず目頭が熱くなった。

最後にもう一度海を見て、僕は家へと向かった。

この日見た景色は、「この海と共に生きるぞ。」と決めた僕の決意と共に、脳裏にはつきりと焼きついた。

私の手をひいて

日頃市中学校二年 紺野 伊歩希

春風に運ばれた穏やかな潮の香りが私の鼻腔を擦る。十二年間共に生きてきた忘れられない香りである。大船渡町、それが私の大切なふるさとの名前。

潮風と桜の花がおだやかに演出する心地よい祝福の二重奏。この春、ついに中学生となった私、千葉悠海。中学校での新生活を一度想像してしまうと、無数の妄想が溢れ出し、昨晩は眠れず、寝不足で登校。通学路は少し遠めで、母の送迎無しではかなりキツイ。だから今日も車での登校。いつもの車、いつもの道、けれどフロントガラスの向こうの景色は、「いつも」の景色が、違って見えていた。

中学校の教室は小学校の教室よりも天井が高く感じた。見たことのない顔ばかりで、とても緊張していた。素早く座席に座った私はキョロキョロと辺りを見回す。知人のいない教室はこうも緊張するものだっただろうか。

「小学校の入学式を思い出すなあ」

私がやっとの思いでしぼり出した声がそれだった。薄氷（うすらい）の上に立たされた私、本当にやって行けるのだろうかと思った次の瞬間、私の視界を暖かい何かが覆った。

「だあれだ。」

私はすぐに気がついた、でも驚きに言葉が遅れてし

まった。

「こんなことで小さくなるなんて悠海らしくないなあ。」

私は手を退け、声のする方へと振り向いた。

そこには口元を緩めニヤついた表情の私の親友が立っていた。

「びっくりしたよ、千紗都ってばどこ探しても見あたらないんだもの。」

「何いってんのよお、ずっと後ろにいたじゃんよ。」

盲点だった。

「悠海ったらいつまでたっても気づかないからこっちが心細くなちゃったよお。」

千紗都の声はよく響く、彼女の声は教室中の人の目を集めていた。

「目立っちゃったね。」

「何いってんのさ、このくらい目立って当然でしょうが。」

千紗都は臆することなく人の集まりに溶け込んでいった。その姿に違和感はなかった。千紗都が彼らの色に飲まれている訳ではない。千紗都が加わることで彼らの色が、千紗都を中心に色鮮やかに活きる。本当に初対面なのかを疑ってしまうほど楽しそうで自然だ。

千紗都のコミュニケーションの力はすごい。

彼女の笑顔からは社交性に満ちあふれた人の心に食

い込んでいく何かがある。

千紗都の混じり気のない本気笑顔、あれが人々を魅了するのだろう。

そんな千紗都が私には輝いて見えていた。

同時にそんな光が遠く見えて、物悲しくなってしまう。

才能に溢れた彼女に私は取り残されているのではないのだろうか。

私は千紗都に手が届いているのだろうか。

背伸びをしても届かないそんな目標に空回りを繰り返す。

昔からそればかりだ。なるべく考えないようにしてはいたけど余計なことばかり考えてしまう。

そのとき、重荷で動けなくなった私の体は強引に、それでも抵抗なくふわりと浮き上がった。私の手を引いていたのは千紗都だった。

そこからのことはかんたんだった。千紗都が話のきかけをつくってくれた。それに話を合わせるだけで、あつと言う間に友達が増えていた。

私の目からは遠く見えていた千紗都は必ず、私を見てくれていた。

今手が届かなくなっていたいいじゃん、いつか届く。

師走の静けさ冬夕焼に淡く照らされた公園の遊具た

ち。ブランコの霜を袖で拭い、そこに腰を下ろした。
「今日は誕生日わざわざ祝ってくれてありがとうね。
すごく楽しかったよ。」

「私がプロデュースした誕生会は楽しかっただろう、
そうだろうねえ。」

私達は小一時間話をした。

思えば二人で話をしたのもこれで何回目だろうか。
何度繰り返してもこれほどまでに楽しい時間はない。

「あのさ、初日のこと、覚えてる。」

「もちろん覚えてるさね。」

千紗都はそんなことは当然覚えているという顔でこ
ちらを見ている。

「あの日千紗都が私を引っぱってくれていなかったら、
私こんな生活でしなかったよ。その、ありがとう。」

私は千紗都にやっと感謝を伝えられた、長い間伝え
られなかったありがとうを。

「私こそ、悠海がいなかったら絶対楽しいことなんか
なかった。私からも、ありがとうね。」

すると千紗都はポケットからまっ白な花のヘアピン
を取り出した。

「これ、私からのプレゼント、感謝の気持ちさね。」

とてもうれしい、こんな気持ち今まで感じたことの
ない全てが満ち足りた様な安心感。

やっと、親友と肩を並べられたそんな気がした。

「私も、三月には誕生日、祝ってあげなきゃね。」

それからの時間は早々と流れ、三月十一日。

朝食を食べていると珍しく父が私に話しかけてきた。

「最近地震が多いな。」

何気ない言葉を私は聞き流した。

私は完全に千紗都の誕生日に気を取られていた。

その日、千紗都は学校に来なかった。どうやら風邪
をこじらせてしまったらしい。放課後にでもお見舞い
に行こう。

せつかくの誕生日が風邪に邪魔をされるだなんて勿
体ない。プレゼント、渡さなきゃ。

午後の授業。皆が憂鬱になって来たころ、

地球が私達を裏切った。

3・11。後にそう呼ばれることになった大災害で
ある。

幸いうちの中学は高台に設立されていたため被害の
心配は無かった。しかし、

「あれっ家、家は、千紗都の家―。」

千紗都の家は、海岸沿いだ。

親は仕事でいないはず、なら千紗都は一人。

「千紗都、千紗都オ。」

気づけば目の前には二人の帰らぬ両親がいた。本人

確認はとも出来なかった。目の前に立っているだけで吐き気がした。

そして私は千紗都の安否を先生に確認した。先生は、顔を曇らせて口ごもったが重く閉じた口を開け、「溺死。」

とだけ口にして地面に崩れ落ちた。

私は何も言えなかった。言葉が喉奥で詰まった。ただただ音のない言葉を発し続け。

気がつけば過呼吸を引き起こしていた。

変わり果てた大船渡の地。生臭い香りはこの町の魚達の臭いだろうか。違うでしょ。

この臭いがこの町の人達だったなんて信じたくもない。そう思うことを私は拒み続けていた、でも拒めば拒むほど考えてしまう。考えない、なんて出来ない。無理なことだ。

両親も千紗都も失った私に何が残るのだろう。狂おしい程の愛しさと物欲しさに空の器が握り潰されそうに怖くてまた過呼吸。

崩れてしまった公園で一人、だれにも気づかれずに、意識が手の届かないところまで遠くなっていく。

気がつくとそこは公園だった。いつも通りの公園、おちつけ、分かっているんだ。いつも通りの公園ではおかしいんだ。

ブランコの持ち手はひどく冷たく、芝生には霜が降りていた。

忘れもしないあの日、私の誕生日。

横を見ればいつもの千紗都がいるのでないかと思い、私の隣にいる人物を凝視した。

茶髪混じりの髪の毛、少し低い位置で結んだツインテール、まっ白なピン。

私は呆気にとられた。そこに座っていたのは、私だった。

「あなた、だれよ、私なの。」

私はニコニコと笑いながら私を見つめている。

「私は私、あなたは私。私はあなた。」

私は理解が追いつかずにただ茫然と立ちつくしていた。私は不思議そうに私を見つめる。

「あなたまた逃げたでしょう。」

「逃げた、逃げたってなんのことよ。」

「あなたの過呼吸、あれがどんな状態で起こってたか自分で分かっている。」

私は苦しい時に過呼吸に――あれ。

あんなに苦しい思いをして、狂いそうなほど泣きたいのに。

「どうして、どうして涙が。」

気づいたみたい、私はいつも涙が出そうになると荒

ぶつて過呼吸を起こすことで皆の死から逃げてたんだ。そう、目をそらしてたんだ、だから真剣に千紗都達と向き合わなきゃ。

私のかけがえのない親友との別れ、でも停滞はダメ。それはあの時千紗都が教えてくれたこと。

「また私の手を引いて、そしたら私、どこへでも行ける。」

ぼんやりとした意識の中で、私の手を引きいつもの笑みで私を安心させてくれる千紗都が見えた。

私が目を開けようとすると痛みがそれを邪魔した。私は気を失っている間、ちゃんと泣いていたんだ。

千紗都は私の希望になった。

奨励賞

【一般部門】

オフーと気仙丸

中村 祥子 さちこ

秋もおわりにちかづいた、ある明け方のことです。

空いっぱい星が、しだいにうすくきえていくころ、今年のはじめての霜がおりました。

「たいへんだ。みんな、おきて！」

ウミネコのオフーは、あたたかいねどこから、まだくらしい外を見てさけびました。

「こんな朝っぱらから、なんだよ」

「みんな白くなっちゃった！」

「ああ、なあんだ。霜じゃないか」

「シモ？」

なかまたちは、まだねむそうです。オフーは、今年生まれた若鳥なので、霜なんて見たことも聞いたこともありません。

「ああ、さむい。しずかにしてよ。まだ日の出まえじゃない」

「ねえ、シモって、なに？」

「だいじょうぶだよ。日がのぼれば、すぐにきえてしまうものだから」

「えっ、きえてしまうの？」

オフーは、もうじつとしていられません。そつとねどこからぬけだしました。

「うわー、すごい！ みんなまっ白だ」

オフーはいつものように、カキ小屋のやねの上におりてきました。ところが、やねも霜でまっ白です。足

をつけたとたんに、つるつるとすべってしまいました。

「あ、あぶない！」

やねのふちにしがみつきながら、オフーはあたりをきよろきよろと見まわして、ホッとしました。だれも見えていなかったようです。

「シモって、おもしろいな。こんなにつるつるだなんて、ぼく、ちっともしらなかった。……それにしても、けさはだれもいないぞ」

小さな港はひっそりとして、海はかがみのようです。

カキ小屋も、まっくらです。

「いったい、みんなどこへ行っちゃったんだろう。船が一そうもないなんてへんだな、へんだな、へんだなあー、あ、あ、あー」

「なんだって？ 船が一そうもないなんて、この気仙丸さまが見えないのか！」

だれもいないと思っていたオフーは、ぎょつとしました。歌いながらとびまわっているうちに、海のまん中にいたのです。とまっていた木は、なんと船のマスツです。でも、船のすがたは見えません。

「いまの声って、まさか、ユウレイ船？」

「なに、だれが、ユウレイ船だと？」

ギャアーーーーー。

「なんだ？ いま、へんな声が聞こえたぞ」

「たいへんだ、オフーがいないよ！」

なかまたちは、あわててオフーをさがしにとんできました。それは、ちょうどお日さまが山のあいだから顔をだしたときです。

「ああ、たすかった……お日さまがのぼれば、もうユウレイなんてこわくないぞー」

空へとにげたオフーは、そんなつやがりをいいながら、そつと下を見おろしました。

朝日がまっ白な霜をてらして、町も山も宝石のようにキラキラと光っています。

「シモって、きれいだなあ」

こわかったことなどすっかりわすれて、うっとりとながめているところに、なかまたちがやってきました。

「オフー、だいじょうぶか！」

「おや、みんな。そんなにあわてて、いったいどうしたんですか？」

あらまあ。オフーは、じぶんのせいだなんて、これっぽっちも思っていないようです。

そこへ、ド、ド、ド、ド、とひくい音が聞こえてきました。港いっぱい空気をつるわせて、たくさん船が帰ってきたのです。

「あれ？ みんな、あっちに行きますね」

どの船も、出荷場にむかっています。長いやねの下では、おばさんたちが船をまっています。

「ぼくたちも行ってみよう！」

「行こう、行こう」

なかまたちがそちらへむかうのを見て、オフーも、あわててついて行きました。

それぞれの船から、つぎつぎとおろされていくのはアワビでした。きょうから、アワビの開口がはじまったのです。

『開口』というのは、漁ができる日のことです。波のない、ほんとうにおだやかな開口の朝は、年になん日もありません。船がいっせいにアワビ漁に出たとき、オフーたちは、まだゆめの中でした。

人々はいそがしくうごきまわり、ウミネコたちはそのあいだをすばやくとびまわります。アワビにまじっている小魚や貝などを、なかまたちはどんだん見つけています。でも、オフーはなかなか食べることができません。

「ほらよー」

やさしいおじさんが船の上から、ポーンと小魚をほうってくれました。

チャンスです。

ところが、なんということでしょう。あつというま

にカラスがとんできて、よこどりされてしまいました。

アホー、アホー。

カラスは、とくいげに魚を食べはじめています。オフーは、くやくしてたまりません。むきになって、カラスをおいかけました。

そうして、あのおそろしいユウレイ船の上とはしらずに、またおりてきたのです。

カラスは、見せつけるようにパクリと魚をのみこんでにげて行きました。オフーは、くちばしでチェツ、チェツと、そこいらじゅうをつついてやつあたりしました。

「いてっ、おい、いたいぞ……こらっ、いいかげんやめてくれ！」

「ギャツ、また出た！」

オフーは、ぶるぶるとふるえています。

「また、おまえか」

「ひええー。ご、ごめんなさいっ。ど、どうか、おゆるしてください、ユウレイ船さまっ」

「ユウレイ船とよぶな。おれは気仙丸だ！」

「ケ、ケ、ケセンマルさま。ぼ、ぼくをおばけの国につれていったりしないで」

「アハハハ。おもしろいヤツだな。おれはユウレイなんかじゃないぞ」

「はあ？」それを聞いたオフーは、やっとふるえがとまりました。

「あー、よかった。さいしよから、そういつてくれたらいいのに」

「おれは、さいしよからそういつていたぞ。船が見えないのは、上からシートをかぶせられているせいさ。こう見えてもおれさまは、さんりく海の博覧会で、一等賞をもらった千石船なんだからな」

「なんだか、すごーく、えらそうですね」

「えらそう？ まったく君はわかっていないな。おれさまのすごい話を、ぜんぜん聞いていなかったのかい？」

「えーと、センゴクセンがどうか」

「ああ、じれったいな。君、博覧会で一等賞をとるつて、すっごいことなんだぞ！」

「そう、そのハ克蘭カイがわかりません」

「もういいよ。千石船というのは、昔の人たちがのっていたでっかい船のことさ。そりやあ、おれさまはちよつと小さめだけど。でも、ほんものとおなじ木をつかって、昔のままのつくりかたでできている。なにもかも、ほんものそっくりなんだぞ」

「なるほど。そっくりだけど、ほんものじゃない、つてことはわかりました」

「ふん。いいにくいことを、はつきりというヤツだな

……でも、氣にいった。ねえ、君。海は、ほんとうに広いのかい？」

「ええ、そりやあ、もう」

「君はいいよな。つばさがあるから……」

気仙丸がかなしそうな声でいったので、オフーはなんだかわいそうになりました。

「おれは、こうして海にうかんでいるけど、ほんとうに船なのかなって思うことがあるよ。じつは、だれかをのせて海をわたったことなんて、まだないんだ」

「えつ、こんなに大きな船なのに？」

「きつと、このままわすれられて……海にしずんでしまおうだろう」

「そんな……」

ニヤア、ニヤア、ニヤアー。

オフーは、まるでネコのようになきました。ウミネコがかなしいときは、ネコのようになくのです。気仙丸もいっしょになきだしました。船のなき声は風のようです。

シュウ、シュウ、シュウー。

オフーの声を聞いたなかまたちは、すぐにどうしたんだろうとあつまってきました。

「オフー、ごはんは食べたの？」

「おなががいたいのかい？」

オフーは、くびをふりました。

「だって、シートをかぶったまま、つながれているなんて。ケセンマルさんが、かわいそうで、かわいそうで……」

「ケセンマルって、だれだ？」

「聞いたことがないわね」

ウミネコたちの話に、気仙丸はもうだまってははいられません。

「なんだ、おまえたちは！ このさんりくにいるのに、この気仙丸を知らないだって？」

「あら、あなたがケセンマルさん？ いつもねむっているから、ユウレイ船だと」

「そうそう。ユウレイ船じゃなかったんだ。ちよつとがっかりだな」

それを聞いた気仙丸は、いよいよしょんぼりして、すっかりいじけています。

オフーは、ぴたりとなきやんでまわりを見ました。どうして、だれもこわがったりおどろいたりしていないのでしょうか。

「みんな、ユウレイ船がこわくないの？」

「あれれ？ オフーは、まだ知らないの」

「きつとこわがって、さいごまでユウレイ船の話を聞かなかったのよ」

「えっ？ なんですか、それ」

「ふふふ。おしえてあげなーい」

なかまたちがニヤニヤしているので、オフーはくちばしをとんがらせていいました。

「それより、このケセンマルさんのことだよ。なんとか、自由にしてあげたいんだけど」

「ああ、それはむりよ。だって、こんなに太いロープでつながれているんだもの」

「そうだな、海のそこにも、大きなおもりがついてい
るみたいだし」

シュウウウウウウウー。

気仙丸から、長いためいきが聞こえました。

「みんな、ありがとう。君たちのきもちはうれしいよ。

でも、もういいんだ。だって、体のあちこちがいたんでいるんだ。いまだって、おなかのあなから海の水がしみこんで……」

そこへ、わたりどりのカモたちが、にぎやかにまい
おりてきました。

「ふうう、くたびれたダヨ」

「あなたたち、いったいどこからきたの？」

「北の国をでてから、きょうで十日目ダヨ」

「これからもつと南へ行くんだヨ」

「ちよつとおやつの時間ダヨ」

「なんだ。なにもないダヨ。あつまっていたから、おいしいものでもあると思ったダヨ」

「ほんと、がっかりダヨ、ダヨ」

カモたちは、またいっせいにとびたっていきます。それを見おくりながら、年上のウミネコたちがいいました。

「もうすぐ、冬がくるね」

「うん、ぼくたちも冬ごもりだな」

「えっ、冬ごもり？」

オフーは、びっくりしました。

「あら、まだ早いわよ。いちばんさむいときだけよ。あらしがつづいて、食べものがなんにもなくなる時があるから」

「そのときは、どうするんですか？」

「あったかいひみつのぼしょへ行くのさ」

「そうそう、とおくへたびするなかもいるけれど。このさんりくは、冬でもあったかいからね。カモたちって、たいへんそう」

「うらやましい話だなあ……」

そういったのは、気仙丸です。オフーたちは、みんなうつむいてしまいました。

「あ、ごめん。また、君たちをこまらせてしまったな。おれのことはいいかからさ。ほら、魚のむれがやつ

てきたぞ！」

大きな大きな津波が、この港をおそったのはそれから四カ月ほどあとのことです。港につながっていた船たちは、みんなながされたり、こわれてしずんだりしてしまいました。

けれども、その中でたった一そうだけ、のこった船があります。

気仙丸です。

くりかえす大津波にもまれながら、気仙丸はひっそりたえました。

そのすがたを見た人々は、気仙丸から大きな勇気をもらいました。

「自分たちだって、がんばるぞ！」

そうはげましあって、たすけあったのです。

「……そのときユウレイ船から、またおそろしい声が聞こえたんだ。『ししやくをよこせー』って」

「やだ、もうこわいからやめて！」

「おもしろいよ。それからどうなるの？」

カキ小屋のやねで、ウミネコのヒナたちに話をして

いるのは、あのオフーです。

若鳥だったオフーも、いまではもうすっかりおとな

になって、りっぱなお父さんです。

「さてまで、ここまでにげるんじゃない。話はさいごまで聞かないと、こうかいするからな」

「おやおや、いったいだれのことをいつているんでしょうね。」

「また声がした。『ししやくをよこせ!』」

でも、ししやくをわたせば、船はユウレイ船の呪いでしずむ。そこで、その男はししやくの底をぬいてから、わたしたんだ」

「へんだよ。ししやくの底をぬいたら、やくにたたないよ。水がくめないもん」

「そのとおり。ユウレイ船は、ししやくで海の水をくんで、船をしずめていたのさ。ところが、底のないししやくでは、いくらやっても水はくめない。船はぶじにたすかった。それから、ユウレイ船にあったら、みんな底のないししやくを、海になげるようになったのさ」

「ああー、よかった」

「ユウレイ船なんて、もうこわくないわね」

みんなでわらいあっているところへ、りっぱな船がゆったりとやってきました。

「やあ、オフリーじゃないか!」

「えっ、ひよっとして、気仙丸さんですか?」

「見てくれ。おれは、にせものなんかじゃない。ほんものの船だったんだぞ!」

まっ白な大きな帆に海風をはらんで、気仙丸が港いっぱいにさけびました。

オフリーもうれしくてたまりません。

「おめでとう! ついにやりましたね!」

秋の日ざしをいっぱいにあびて、気仙丸は、広い海をどうどうとすすんで行きます。そのあとは、オフリーたちが、にぎやかについて行きました。

作品集

《小学生低学年部門》

三人兄弟のぼうけん

猪川小学校二年 千葉 妃奈多

大ふなと市のいかわ町に、三人の兄弟がすんでいました。一ばん上の兄さんはやさしくて、二ばん目の兄さんはおもしろくて、三ばん目の妹はあまえんぼうでした。

ある日、お母さんに、

「山へ行つて木のみをとつてきてくれない。」

と言われました。三人は、

「わかった。」

と言つてかごを手にもち、しゅっぱつしました。川をこえ、たにをこえ、やつと木のみがある山につきました。三ばん目の妹が、

「はあ。やつとついた。」

と言つてすわりこみました。すると一ばん上の兄さんが、

「いや、まだまだだよ。」

と言つて妹の体をおこしました。二ばん目の兄さんが、

「えー、もうつかれてあるけないよ。」

と言いました。すると一ばん上の兄さんが、

「つかれたのは、みんな同じだよ。」

と少しおこつた声で言いました。二ばん目の兄さんはしょんぼりしながら、またあるきはじめました。

しばらくあるいていくと、今出山のくまさんが、

「どごさいぐの。」

と聞いてきました。三人は、

「木のみをとりにかくんだよ。」

と答えました。くまさんは、

「それなら、今出山のおくの方に、ほしのようにキラ

キラしているみがあるよ。ケーキにのせて食べるととてもおいしいんだよ。」

と教えてくれました。一ばん上の兄さんが、

「よし。みんなでほしの木のみをとりにかくう。」

と言いました。三人は、

「しゅっぱーつ。」

と声をそろえて元気に言いました。

またしばらくあるいていくと、いろいろな色をしたきのこさんたちに会いました。三ばん目の妹が、

「ほしの木のみは、どこにあるのですか。」

ときのこさんたちにたずねました。黄色いきのこさんが、

「ずっとずっといったところの山のとっぺんさ。」

と教えくれました。三人は、

「ありがとう。」

と言つて、教えてもらった方にむかつてまたあるき出しました。

ずっとあるいていくと、ちよつとうすきみわるい森がひろがつているところにさしかかりました。三ばん目の妹が、

「なんだかこわいね。」

と言つて、一ばん上の兄さんの後ろにかくれました。けれども、三人はゆう気を出して前にすすんでいきま

した。ふくろうの鳴き声が時々聞こえてきました。

「ホーホーホー。」

いろいろなところから聞こえてきたので、三ばん目の妹が、

「こわいよ。こわいよ。」

となきだしそうになりました。それでも三人はすすんでいきました。

またしばらくあるいていくと、とおくに明るい光を見つけました。そこは、お日さまがかがやいていて、明るい道につながっていました。その道をすすんでいくと、道のむこうになにかキラキラ光っているものが見えました。三人は、

「あれが、ほしの木のみじやないかな。」

と言って走っていきました。ほしの木のところにつくと三人は、

「やったー。やっと見つけた。」

とよろこびあいました。

木にはほしのようなキラキラ光るみがたくさんなっていました。それはそれはおいしそうな木のみでした。三人はむちゅうでほしの木のみを二十ことつてふくろにいれました。そのふくろをかつごとしたとたん、そのふくろが光り出しました。あんまりまぶしかったので、三人は気をうしなっていました。

しばらくして目がさめると、そこは家のベッドの上でした。三人はぐっすりねむっていたのです。お母さんは、

「おかえりなさい。」

とやさしく言いました。三人は、

「ただいま。」

とねむいめをこすって言いました。

三人がおおをあらって、テーブルのいすにすわると、おいしそうなケーキがおいでありました。ケーキはととてもおいしそうなほしの形をしたみがたくさんのもっていました。そのケーキはキラキラして、とてもいいにおいがしました。

スネカのものがたり

吉浜小学校 二年 吉田 風沙

むかしのこと。よしはまに、わるい子どもがいました。

「わあい。おいかけろ。」

「ばあか。お前なんか、あっちに行け。」

さどくと広山くんは、いつも友だちをいじめていました。二人のいじわるは、なかなかおりませんでした。

した。

そこで、大人たちが考えました。

「子どもがこわがりそうなやつで、今年は少しおどかしてやろう。」

広山くんのおじいさんが言いました。そして、さとくのおじいさんも言いました。

「そうじゃ。オニみたいなのにしよう。名前も考えたんじゃ。それは、スネカじゃ。」

スネカは、もじやもじやあたまで目はとても大きくてつり上がっています。体中、わらでつつまれています。こしにはアワビの貝がらがたくさんついています。

うごくたびに、ガラガラガラと大きな大きな音がひびきます。せなかには、子どもが入るくらい大きなたわらをしょっています。

今年の一月十五日におどかすことにしました。

一月十五日の日。

さいしよは、広山くんの家でした。ドンドンと戸をたたく音がして、

「なぐ子は、いねえが。いじわるする子、いねが？」

広山くんは、

「いません。」

と、なきながら言いました。

「うそついてねえが？」

げんかんから、スネカが入ってきました。三人のスネカが、ほうちようをふり回したり、足をドンドンならしたりしました。広山くんは、とてもこわくなりました。

「うそつくと、せなかのたわらに入れて、山につれて行くぞ！」

「いじわるする子、いねえが？」

そして、広山くんは、こう言いました。

「いますけど、もう二どとやりません。」

「やくそくするが？」

広山くんは、うなずきました。

「ゆびきりげんまん、うそついたらはり千本のます。

ゆびきった。」

「ぜったい、まもるんだぞ。」

つぎは、さとくんの家でした。ドンドンと戸をたたく音が聞こえて、スネカが来ました。

「なく子はいねえが。いじめっこは、いねえが？」

さとくんは、こう言いました。

「ごめんなさい。いじめをしちやいました。ごめんなさい。」

「よし。正じきに言ったな。これからは、いじめをしないんだぞ。」

「ゆびきりげんまんだな。ゆびきりげんまん、うそつ

いたらはり千本のます。」

スネカは、さくとんとやくそくして、帰って行きました。

そして、二人はスネカとのやくそくをまもり、今ではやさしい子どもになりました。

「おいでよ。来なかったらこちよこちよしちゃうぞ。」

「わあい。楽しいな。」

今でも、よしはまでは、一月十五日になると、スネカが来るのです。そして、よしはまの子どもたちは、なかよく、正じきにくらすことができます。

なおとのぼうけん

吉浜小学校二年 田中 莞奈

ある日、なおとという男の子が、よしはまトンネルの見学会に行きました。なおとが、トンネルの中をのんびりあるいていると、ふしぎなことに気がつきました。トンネルをぬけると明るくなるはずなのに、夕方みたいに少しくらいのです。

あたりまえです。そこは、うちゅうなんですもの。なおとは、「あれ、何でだろう。」と思いました。なお

とは、思いきつてあるいてみました。ふしぎなことに、あるけました。いきもできました。なおとは、

「何で。」

と言いました。そして、どんどんあるいていると、たからばこがありました。なおとは、

「たからばこだあ。」

と大声を出しました。中には、地図が入っていました。

地図のとおりにあるいていくと、土星のところにつきました。そこで一休みしていると、なおとがだんだん小さくなっていきます。なおとは、「ぼく、ちっちゃくなってる。」と思いました。

なおとがこまっていると、しかがあらわれました。しかは、小さくなったなおとをせなかにのせてくれました。あるいていくと、くまがいます。なおとはこわくなってきました。でも、出てきたのはやさしくまです。なおとは、あんしんしました。くまは食べ物がないでこまっていたました。なおとのポケットの中にアワビが入っていたので、くまに分けてあげました。

「ありがとう。とってもおいしいよ。」

「どういたしまして。」

「おかげで元気が出たよ。」

くまは、なかまになつてくれました。

なおとは、地図のことをなかまに話しました。ゴー

ルをめざしてあるきはじめてその時、こわいくまがあらわれました。なおとは、なかまにこう言いました。

「みんな、にげよう。」

そして、みんなは、もうスピードでにげました。むちゆうで走っていくと、なおとは気づきました。

「海になつてる。」

なおとは、びつくり。ボートがあつたので、こんどはボートにのっていくことにしました。しばらくすると、えきがありました。そこに、三てつがとまりました。でも、ふつうのれっ車じゃありません。羽がついていて、空をとんできたのです。それは「まほうの三てつ」でした。空をとんで、どこにでもいけるのです。なおとは、おうちに帰りたくなりました。

「ぼくの家に行つて。」

と、たのみました。そのとたん、なおとの体が元の大きさにもどりました。なおとは、

「よかった。」

と言いました。しかとくまも

「よかったねえ。」

とよろこんでくれました。

空とぶ三てつにのると、なかまたちとおわかれです。

「ばいばい。またあおうね。」

と、みんなは手をふりました。

なおとくんは、いい気持ちで目がさめました。今までのことは、ぜんぶゆめだったのです。長い長いぼうけんでした。

みらいへの三てつれっ車

吉浜小学校二年 中井 たまえ

大ふなどには、三てつというれっ車があつて、赤と青のかっこいいもようがついています。ほかの色のれっ車もあります。

一年生のたまえちゃんは、しゅうだんとう校なので、いつもゆうびんきよくにあつまっています。あるいているとちゅうには、いつも三てつにあいます。手をふると、あいさつがわりにれっ車が

「ポッ」

とならしてくれるので、うれしくなります。

ある日、三てつが、ほかのれっ車とつながっていました。三てつで二ごう車までつながっているのは、はじめて見ました。

「こんなのはじめて。すごいなあ。」

たまえちゃんは、その三てつに、のってみることにしました。

一ごう車は、ふつうでしたが、二ごう車は、みらい

につながるれっ車になっていたのです。そこには、お母さんになったたまえちゃんがいて、かわいい0さいくらいの男の赤ちゃんが生まれていました。

たまえちゃんは、みらいのじぶんとお話をしました。

「みらいのよしはまって楽しいの。」

と聞きました。みらいのたまえちゃんが言いました。

「うん。楽しいよ。」

「みらいって、どういうところが楽しいの。」

と、たまえちゃんが聞きました。

「どうぶつとおはなしができるの。」

たまえちゃんは、びっくりして聞きました。

「どうやってどうぶつと話せるの。」

すると、みらいのたまえちゃんは教えてくれました。

「よしはま海がんの貝がらで、ネックレスを作るの。」

それをつけるとどうぶつとなかよくお話ができるのよ。」

「すごいね。わたしもほしいな。」

「よしはま海がんに行ってみたら？」

たまえちゃんは、

「今は工事をしているから、海には行けないの。」

と、さみしそうに言いました。たまえちゃんは、小さいころよしはま海がんに行ったことがあります。

「パパとママと行って、うきわであそんだんだよ。と

っても楽しかったな。工事が終わったら、またそうや

ってあそびたいな。」

「そうだったの。じゃあ、また海であそべるのを楽しみにしているのね。」

と、みらいのたまえちゃんは、やさしく言いました。

「今、たまえちゃんは、何が楽しいの。」

とみらいのたまえちゃんが聞きました。たまえちゃん

は、

「学校だよ。体いくと図工が好きなんだ。体をいっぱ

いうごかして、あそびみたいだから楽しいよ。」

と言いました。そしたら、

「やっぱりわたしと同じだ。体をうごかすのっていい

よね。これからも元気で百さいまでがんばろうね。」

とみらいのたまえちゃんが、わらいながら言いました。

「また、このれっ車にのってお話しようね。」

よしはまのふしぎなしぜん

吉浜小学校二年 中井 真央

まおちゃんは、よしはまにすんでいます。ある日、

じいじといっしょに海に行ったら、ウニが千こいじょ

うも出てきました。まおちゃんは、びっくりしました。

大ふなどには、いっぱいしぜんがあります。山のお

くには、きつねやうさがいっぱいです。海には、魚もたくさんいます。まおちゃんは、そんな大ふなどが大すきです。

じいじとばあばは、まおちゃんにいろいろなことを教えてくれます。スネカのわらをまくらの中に入れると、いいゆめが見られるそうです。

まおちゃんが、スネカのわらをまくらに入れてみたら、ふしぎなゆめを見ました。

まおちゃんは、なかよしのあやのちゃんと森の中にいました。森の中に入っていくと、たくさんのおうぶつがパーティーをやっています。それを見ているだけで、まおちゃんは楽しくなってきました。じっと見ていると、ふしぎなことがおこりました。

ふしぎなこととは、ねこの三きょうだいであらわれたのです。そのねこたちは、金色でした。ねこが、わたしたちに言いました。

「いっしょに、ねこの町に行こう。」

わたしたちは、行ってみることにしました。

ねこについていくと、一分もたたないうちに、ねこの町についてしまいました。ねこたちは、アワビやタイとかいろいろな魚をごちそうしてくれました。どの魚も、すごくぴっぴかぴっかで、たからものみたいでした。

「すごくおいしい。」

と二人が言いました。

「このアワビは、よしはまのりようしの名人がきびしくみとめた、とてもおいしいアワビなんだにゃあ。」

ねこの町で二人は、いっぱい友だちもできたし、あそんだりおかしもたべたりしました。

あやのちゃんが、とつぜん大声を出しました。

「そろそろ家に帰らないと、お母さんが心ばいしちゃう。どうしたらいいの。」

すると、ねこのリーダーが教えてくれました。

「それはね、あいことばを言うとしはまにもどれるんだにゃあ。」

「あいことばって、なあに。」

「タイにアワビにカレイがいっぱい。よしはまのまちにもどれ！」

二人は、声をあわせて

「タイにアワビにカレイがいっぱい。よしはまのまちにもどれ！」

と言いました。

そうしたら、二人はとつぜんきました。まわりを見回してみたら、そこはよしはまでした。二人はおんなじことを思っていました。

「また、行きたいなあ。」

パーティーは、すごく楽しかったようでした。でも、

今回の話はこれまで。

さあ、二人はまた、ねこの町に行けたのでしょいか。今、読んでいるあなたも、金色のしゃべるねこを見つけたら、行けるかもしれませんよ。スネカのわらをまくらに入れて、いいゆめを見てね。

《小学生高学年部門》

海くん

大船渡小学校四年 村上 冨凜

かけがえのない友達、海くん。海くんは、優しくて、人間が大好きなの。でもね、今、海くんと全く会っていない。それは、「あの日」から。

二〇十一年三月十一日、午後二時四十六分、「あの日」がやってきた。その日も海くんと遊ぶやくそくをしていた。でも、とつぜん大きなじしんがおきて、つなみが来た。海くんは、つなみになった。そして、友達の家を飲みこんだ。その日をさかいに、海くんとは、会っていない。

「あの日」から四年がたち、当時、保育園の年長だったわたしは、小学四年生になった。九月のある日、先生が言った。

「市場に社会科見学に行きます。」

まだ、海くんがこわいわたしにとって、おそろしい一言だった。

何もできないまま、とうとう社会科見学の日がやってきた。ゆううつなまま、バスに乗りこんだ。

市場に来た。なつかしい、海くんがいた。

目があった。でも、「あの日」のことを思い出してつらくなる。だから、むしをした。市場の人の話を聞き、帰ろうとしたとき

「ごめんね。ぼく、かすみちゃんのこときずつけちゃったんだね。」

と、海くんが言った。わたしにだけ、はっきりと聞こえる声で。わたしは、小さくうなずくと、その場をにげ出した。

家に帰り、小さいころのわたしと、幸せそうな顔をしている友達の心ちゃんが写った写真を見た。わたしは、かくごを決めた。海くんと話すかくごを。

日曜日。わたしは、海くんと会った。

「どうして、心ちゃんの家を飲みこんだの。どうして、この町を、大船渡をこわしたの。」

いかりをぶちまけた。

「……ごめんよ。でも君の友達の家をこわしたかったんじゃない。海にゴミをすてる人に分かってほし

かったんだ。ぼくらをおこらせると、こうかいするって。でもそのことがたっくさんの人をきずつけるなんて。……。君もきずついたなんて気づかなかったんだ。」

海くんが苦しんでいることがびんびん伝わってきた。海くんを、わたしはゆるそうと思った。心ちゃんも同じ気持ちだと思ったから。

「海くん、分かったよ。わたしもむしして、ごめんね。」わたしはがわらうと、海くんもわらった。一緒にわらった。

それから十五年後……。

「海くーん。」

「なーにー。」

海くんとわたしは、四年生のときの仲直りからずっと仲良し。海くんは今もやさしくて人間が大好き。来月産まれてくる、わたしの赤ちゃんも、海くんをきつと好きになってくれるだろうな。

海の中の物語

越喜来小学校四年 田中 聖大

ある夏の日、浪板の海にもぐって遊んでいたら、海

の底に光るものがあつた。手に取ってみると、ピンポン玉くらいの大きさの水晶だった。

「きれいだなあ。」

ぼくは、その水晶の玉を、こしにつけていたふくろに入れておいた。

ふと横を見ると、おかしなどうくつがあつた。どうくつの横に、「竜宮城、このおく」と書かれているのだ。「怪しすぎる……。」と思いながらも、ためしに入ってみることにした。どうくつをのぞいてみると、ずつと先に青い光が見える。ぼくは、その光を目指して進んだ。

どうくつを出た先には、なんと町があつた。岩や貝がらでできた家がならんでいた。お城みたいな建物も見える。

「きつと、あれが竜宮城だな。」

いろいろな色や大きさの魚たちがいっぱいいた。すると、ぼくに気づいた魚たちがぼくをとりかこみ、町のおくのワカメの森へ連れていってくれた。そこには、にじ色の魚がいてこう言った。

「あなたは、この町を守ってくださいるお方ですね。その水晶は、強くて正義の人である証。どうかこの町をさがすま王をやっつけてください。」

ぼくはびっくりして、

「ま王ってだれ？」

ときくと、魚たちが声をそろえて言った。

「そのま王の名は、ホホジロザメ」

にじ色の魚は続けた。

「ホホジロザメは、海をあらし、魚たちを食べ、町をこわす、きょうぼうなお方なのです。竜宮城もうばわれてしまいました。この町にいた強い魚たちがたたかったのですが、みな、たおされてしまいました。そこで、だれか強い方が来てくださるのを待っていたのです。」

ぼくは、そんなにきょうぼうなやつは聞いたことがないと思った。そのサメがどうしてこの町に来たのかも、にじ色の魚にきいてみた。

「むかし、この三陸の海は、とてもきれいでおだやかでした。ある日、海の上からなにやら不思議な、たまご型のカプセルが落ちてきたのです。それには『開けるな』と書かれていたのですが、ある魚がゆうわくに負けて、そのカプセルをわけてしまったのです。その中からま王がでてきてしまったのです。」

「おーい、出たぞ。出たぞ。ま王だ！ホホジロザメだ！みんなかくれろ。」

と長い岩の方から声がした。そちらに目を向けると、

五メートルもある、とても大きなサメがものすごいスピードでやってきた。

にじ色の魚が急いで岩のかげに泳いでいった。そしてにじ色のつるぎをぼくにわたしてくれた。

「ま王には、弱点があると聞いています。そこを突けば、またカプセルにとじこめられるそうです。どうか、よろしくお願いします。」

ぼくは、けんかが強くない。じゅう道やけん道を習っているわけでもない。でも、泳ぎだけは自信がある！こうなったら、がんばるぜ！

ぼくはつるぎをにぎりしめ、ワカメの森から出て行った。サメの頭を切ろうと真正面から向かっていったが、尾ひれで飛ばされてしまった。負けてたまるかと、思いつ切りつるぎをふり回したが、サメは大きい口を開いて、ぼくを食べようとした。ぼくはそれをよけたが、今度はむなびれでなぐられ、はじき飛ばされた。そのしよげきで、つるぎがちんぼつ船のかげに飛ばされてしまった。

このままでは負けて、食べられてしまう。つるぎを拾って、ちんぼつ船の中に入って、作戦を立てることにした。まず弱点を探すことだ。ぼくは、ちんぼつ船のあなから、サメをじっと見た。サメは、おこったまま、回りをぐるぐる泳ぎ、時々体当たりしたり船をか

じったりしている。どこが弱点なんだろう？目？背びれ？エラかな？

サメが今までにないスピードで、体当たりしてきた。ちんぼつ船は、ぐらぐらとゆれ、ぼくは、ゆかに転がってしまった。その時、見えたんだ。サメの体の真下むなびれとむなびれのちょうど真ん中辺りに、弱のマークが。「まさか！」と思ったけれど、竜宮城だって本当にあった。あそこを突けばいいんだ。

ぼくは、考えた。どうすれば、サメの下にもぐれるんだろう。

「そうだっ！」

ぼくは、魚たちに作せんを伝えた。泳ぎの速い魚たち何びきかに、ワカメの森にサメをおびき寄せてもらうそして、ワカメのかげから、

「こっちだよ。」

と顔を出してもらうのだ。サメはおこって、そちらに向かっていく。そのとたん、後ろからも、横からも

「こっち、こっち。」

とよんでもらうのだ。サメは、単じゆんだから、おこって、あっちこっちに泳ぎ回っているうちに、ワカメにからまってしまった。

「今だ。」

ぼくは、もう一度つるぎをにぎりしめ、サメの下に

もぐって、弱マークを突いた。そのとたん、水晶がまぶしく光り、その光がサメをつつんだ。

数秒後、光はおさまり、その後には黒いたまご型のカプセルがあった。

ワカメの森からたくさん魚たちが出てきた。

「やった！」

「ま王をたおしたぞ。」

と口々にさけんでいる。にじ色の魚も出てきた。

「ま王をたおしてくれてありがとうございます。このカプセルは、また開けてしまうことのないように、竜宮城のろう屋にうめておくことにします。」

と言った。

「そろそろ帰らなくちや。またいつかこの町に来るよ。」

そう言ったばかりに、にじ色の魚は光かがやくにじ色の服をくれた。けんかになった時、その服を着ると、相手はやる気をなくし、仲良くなれるそうだ。ぼくは、

「それをにじ色の魚が着てたかええ、サメと仲良くなれたんじゃないかな。」とちよつと思っただけで、

サメは他の魚たちのことはおそうかもしれない。

「それじゃ、また会おう。」

とぼくは言って、どうくつをぬけた。ふり返ってみると、「竜宮城、このおく」というかん板は、なくなっていた。それどころかどうくつの入り口がだんだんし

まってきたいる。

「これじゃ、もう行けないよ。」

さびしくなつて、にじ色の服を着てみると、とたんにごくつが開き、かん板が見えた。ぼくは、うなずいて、

「そういえば、全然息が苦しくなかったなあ。」
と思いながら、海の上へと帰って行った。

その後、ぼくはにじ色の服を着ていない。友達とけんかになったり、からかわれたりすることはあるけれど、その時は海の中のことを思いだす。勇気を出して、知えをしぼっていけば、乗りこえられる気がするからだ。

今年の夏は終わり。来年にじ色の服を着て浪板の海にもぐるのが、とても楽しみだ。

宝さがし

越喜来小学校四年 遠藤 玲奈

「へえ、今出山つて金がとれたんだ！金がとれたのなら、ほかにも宝石が見つかるかも！」

わたしは、朝早く、宝さがしに山へ出かけました。山おくに入りました。どんどん歩いていくと、きりで

まっ白になりました。でもまっすぐ進んでいくと、パツときりが晴れました。そこは色とりどりの花がたくさんさいている野原でした。

うさぎさんが、わたしのところへたつたつと走ってきた、

「わたしの大事なネックレスがなくなっちゃったの。」
と言いました。

「ネックレスね。分かった。いっしょにさがしに行こうよ。」

わたしとうさぎさんはネックレスをさがしに行くことにしました。うさぎさんのネックレスには、ダイヤモンドがついていて、とてもキラキラしているそうです。本当に宝さがしになってきました。

野原をぬけて、どんどん歩いていくと、なんだか様子のおかしいたぬきさんがいます。そわそわ、きよろきよろしています。

「たぬきさんにきいてみようよ。何か知っているかもしれない。」

「そうね、きいてみよう。たぬきさん、うさぎさんのネックレス知らない？」

わたしがきくと、

「ネックレス？ぼくは知らない。だ、だ、だって、ぼくは、ずっと家の中にいた。だから、し、し、知らない」

い。」

と答えました。わたしは、

「ありがとうね、たぬきさん。」

と言って、先に行こうと思いました。するとうさぎさんが言いました。

「たぬきさん、何かかくしてるんじゃない。」

「えっ、そうかな。たぬきさんはちゃんと本当のこと言ってくれたと思うよ。そうだよね、たぬきさん。」

わたしは言いました。うさぎさんは、

「そうね、気にしすぎかもしれない。うたがってごめんなさい。」

「えっ。う、うん。いいよ。」

たぬきさんは言いました。

実は、このたぬきさん、むすめのおたん生日のプレゼントをさがしているときに、ネックレスを拾ったのです。たぬきさんは、ネックレスをおかしの箱に入れて、ひみつの場所にかくしておいたのです。だからとてもドキドキしていました。

「ぼくがネックレスをかくしたことがばれたら、どうしよう。見つかったら、家族にもめいわくをかけちゃうな。」と思っていたのです。

二人がまたさがしに行くのを見て、たぬきさんは、ほっとしました。

「ネックレスは、来年買ってあげよう。今日はお花をあげよう。うちの子は、かわいくてきれいな花が大好きだからな。」

とつぶやきました。

わたしとうさぎさんは、たぬきさんをおいて、また歩き始めました。進んでいくと、夜になってきました。

「なんか寒くない。」

とわたしが言うのと、うさぎさんがわたしの手をにぎって、

「こわいなあ。」

と言いました。ふるえながら歩いていくと、白いものがすうっと来しました。

「きやー、おばけー。」

とにげようとしたとき、ゆうれいさんが、

「こわがらないで、お願い。」

といきなり泣き出しました。それでもこわくて、わたしは固まってしまいまいした。するとうさぎさんがふるえる声で言いました。

「だって、ゆうれいって、『うらめしやー』ってこわがらせるんじゃない。」

ゆうれいさんは、

「そんなゆうれいばかりじゃないわ。こわいイメージ

があるけれど、よいゆうれいだっているのよ。わたしはみんなと遊びたくてゆうれいになって出てきたのに、みんな、すぐににげてしまつて、とても悲しいの。」

「そうだったの。じゃあ、いっしょに遊びましょ。」

わたしたちはおにごっこをして遊びました。

ゆうれいさんは、ふわふわ飛んだりひゆうつと飛んだりしてなかなかつかまりません。たくさん遊んで、あせをかきました。リュックからお茶とサンドイッチを出し、ひと休みすることにしました。

「そういえば、どうしてここまで来たの。」

とゆうれいさん。

「あつ！そうだった。うさぎさんのネックレスがなくなっちゃったから、さがしていたの。早くさがしにいかなきゃ。」

「そうだね、ゆうれいさん、ごめんなさい。みんなに、ゆうれいさんをこわがらないでいっしょに遊んでねって言っておくね。それじゃ、バイバイ。」

うさぎさんとわたしは手をふりました。ゆうれいさんも

「お願いね。ありがとう。」

と手をふりました。

わたしたちは、急いでネックレスをさがしに行きま

した。歩いていくと東の空に朝日が上がってきました。とても明るくて、まぶしいので、何も見えないまま、手をつないで歩きました。やっと目をあけられるようになる、きらきらした箱がありました。

「わあ、きれいな箱！」

中を開けると、とってもきれいなキラキラしたネックレスが入っていました。

「あつ、これって、うさぎさんのネックレスじゃない。」

とわたしが言うと、うさぎさんは、

「わたしのネックレスだわ。ありがとう。」

と言って、さっそく首につけ、ぴよんぴよんとび上がって喜びました。そして、パツと消えてしまいました。

「うさぎさんのネックレス、みつかつてよかったなあ。」

と思っているうちに、わたしは、だんだんねむくなつてしまい、草の上に横になりました。

目が覚めると、わたしの部屋のベットにねていました。びっくりしてきよきよを見ると、キラキラがやく小さな箱がまくらもとにありました。箱を開けると、うさぎさんやたぬきさん、ゆうれいさんの顔が、ふつとうかびました。わたしの宝物が一つふえました。

お母さんが

「ごはんよー。」

と言っています。わたしは、元気に返事をして、部屋

を飛び出しました。

ゆりかちゃんとはばさくんとたぬきの物語

越喜来小学校四年 岡澤 璃和

夏虫山に、いたずら好きなたぬきがいた。そのためきは、人間のいる村に下りてきて畑をあらしたり食べ物をぬすんだりしたりした。そのため、村の人は食べ物がいなくなりこまっていた。たぬきにしてみればいたずらでも、村人にとっては大問題だ。

ある日、たぬきをつかまえに行くと言って森に入っていた男がいた。ところが、その人は何日たってもどつてはこなかった。

またある日、もう一人の男が森へはいつていった。数日後、その男の人は帰ってきたものの、ひどいけがをしていた。その人によると、森には、どくへびやらどくグモやラクマやら、なんとドラゴンまでいたそうだと。すると、

「わたし、行ってみたい。」

とゆりかちゃんという女の子が言った。

「ダメよ。ゆりかにはきけんだわ。大人の男の人だつ

て無理だったのに。」

とお母さんが言った。

その夜、ゆりかちゃんはどうしても森に行きたかったので、部屋の窓からぬけ出した。おさななじみのつばさくんというおく病な男の子もさそって行った。つばさくんは、

「ぼく、いやだよ。行きたくないよ。」

と言ったけれど、

「じゃあ、もう遊んであげないわよ。」

と言われ、仕方なくついていくことになった。

森に入ると、さっそくクマがねていた。二人は、いつもお母さんに教えられていたように、走らず、静かに後ずさりをしながらにげた。クマが見えなくなつてから、二人はあわてて走つたので、道に迷つてしまつた。すると、ゆりかちゃんは、

「たぬきをつかまえになんか来なきゃよかった。」

と言いだめた。

「帰りたいよ。ぼくたち、どうすればいいんだろう。」

と、つばさくん。その時、

「君たち、何をしているんだい。」

と知らないおじいさんが声をかけてきた。

「わたしたち、村の人たちをこまらせているたぬきをつかまえに来たの。お母さんには、反対されたけど、

村の人たちの役に立ちたかったんだ。」

「そうか、そうか。勇気のある子どもたちだな。ではこれを持って行くといい。」

と言うと、おじいさんはふくろをくれた。

「この中には、どんなきょうぼうなものもおせる粉が入っている。この粉をふるだけでいいんだ。この間来た男たちにも分けてやったんだが、使わなかったようじゃな。たぬきのいるお城はあっちだよ。」

「ありがとう。」

二人はたぬきがいる方向へ行った。するとどくグモがいた。

「どうしよう、こわいよう。」

とつばさくんが言うと、

「だいじょうぶよ。」

とゆりかちゃんがむねをたたいた。そして、リュックの中から、さつきおじいさんにもらったふくろを出した。ゆりかちゃんが、粉をどくグモに少しかけると、すぐにクモは巣からころりと落ちた。

「これ、すごい。」

二人は声をそろえて言った。

どんどん進んでいくと、川があった。だが、橋がこわれており、わたれなかった。ゆりかちゃんはリュックの中からおかしを出した。そして川に向かって言っ

た。

「ねえ、君たち、わたし、この川をわたれなくて、こまってるんだよね。君たち、ここにならんで橋を作ってくれたら、これあげる。」

すると、たくさんの魚が集まってきた。魚の橋をわたると、ゆりかちゃんが一びきずつにおかしをわたした。魚たちはうれしそうに泳いでいった。

しばらく進むとどくへびがいた。おじいさんにもらった粉をふると、へびはとぐろをまいたまま動かなくなった。

「どうしてこんなにききめがあるんだろう。」

二人はほっとしたけれど、少しこわくもなかった。

二人がしばらく進んでいくと、がけがあった。二人はがけをのぼっていった。がけの上につくと、つかれておなかもすいていたので、そこに生えていたキノコを焼いて食べた。おいしいキノコだった。その後、歩いていくと、はでな色をしたきのこがあったので、それはリュックに入れておいた。

突然、大きなドラゴンがあらわれた。ドラゴンが火をはいているときに、ゆりかちゃんは、さつきとったきのこをドラゴンの口の中に投げた。すると、ドラゴンは笑い始めた。

「ふおっふおっふおっふおっ。なんだか、おかしいぞ。」

ふおっふおっふおっ。止まらないぞ。ふおっふおっ。く、苦しい。ふおっふおっふおっ。」

きのこは、ワライダケだったのだ。苦しそうに笑っているドラゴンのわきを通りぬけて、とうとう二人は、たぬきがいる城に着いた。

たぬきは、もともとは、すごく弱かった。すもうをとると、うさぎやりすにも負けてしまう。でも、たぬきは負けても負けても、何度も勝負した。ある日、すもうで投げ飛ばされ、うでや足をけがしてしまった。

「どうして、ぼくはこんなに弱いんだろう。」

たぬきが泣いていると、そこへライオンが通りかかった。このライオン、とても優しいのだが、見た目がこわいため、友達がいなかった。すぐにたぬきのけがの手当てをしてくれた。

「たぬきさん、一つお願いがあるんだけど。」

「何？」

「ぼくと友達になってほしいんだ。」

「いいよ。その代わり、ぼくが強くなるようにきたえてちょうだい。」

そして二ひきは友達になった。

たぬきは、ライオンにきたえられて、少しは強くなったけれど、相かわらず弱いままだった。でも、いつもライオンといっしょにいたので、他の動物は、たぬ

きの姿を見るだけでにげてしまう。すもうをとっても、わざと負けてしまう。たぬきは、自分が強いとかんちがいしてしまった。

城の前には、見張りの動物たちがいた。ライオンに食べられるのをおそれて、家来になった動物たちだ。ゆりかちゃんとはつばさくんは、近くにあみがあったので、それを見張りの動物にかけた。動物たちは大人しくしていた。

城の中へ入って、つかまっている動物たちを助け、その動物たちと、たぬきがいる部屋に着いた。すると、たぬきはたくさん動物兵士をよんだ。助けられた動物たちは、動物兵士と戦った。うさぎはジャンプで兵士に体当たりし、くまは兵士を持ち上げ、ゆかへ落とした。トラは、いきおいよく走って兵士もライオンも突き飛ばした。ゆりかちゃんとつばさくんは、たぬきに向かい合った。たぬきは、

「すもうで勝負しよう。」

と言った。ゆりかちゃんは、

「さあ、がんばって！」

と、つばさくんの背中をたたいた。つばさくんは、たぬきを上手投げで投げ飛ばした。つばさくんは、おく病だけど力持ちだったのだ。

たぬきをつなでしばって、ゆりかちゃんとつばさく

んは、村へ帰った。村では、たくさんの人たちが二人をさがしていた。

「ゆりか、どこなの。」

「つばさ、どこ。」

そこへ二人がかえってきたので、

「ゆりか、よかった。つばさくんも無事でよかったわ。」

とお母さんがだきしめた。

たぬきは村人の前でどげざして、

「お願いです。助けてください。これから悪いことはしません。」

となみだを流しながら言った。村の人たちはたぬきがかわいそうだったのでたぬきをにがしてあげることにした。

「もうこんなことしないでね。」

とゆりかちゃんがい、

「そうだよ、また悪いことしたら今度は本当にたぬきじるにしちやうよ。」

とつばさくんが言うと。

「もうしませーん。」

と言、森へにげていった。

「よかった。」

と二人は声をそろえて笑った。

その後、村の畑では作物がよく育った。二人がみつけたがけの上のきのこも、とてもおいしいとひょうばんで、高く売れたそう。ドラゴンやどくグモも、いつの間にか山からいなくなった。今、村は平和だ。

ケンタとゲンの大ぼう険

越喜来小学校六年 窪田 藍子

昔、「サンリク島」に、ケンタという十二才の男の子がいた。両親はケンタがおさない時に「ホレイ島」の巨人によって行方がわからなくなってしまう、今はこの島にたった一人で住んでいた。

ある日、ケンタは決意した。

「父さんと母さんを探しに行く。」

と。

次の日、ケンタは自分で作った船で、サンリク島を出発した。しかし、旅はそううまくはいかない。船の背後からせまっている、おそろしい気配にケンタは気づいていなかった。

海へ出て、三時間ほどたっただろうか。ケンタは、こくりこくりと、ねむってしまった。

すっかりねむってしまったケンタに海のきょうふがおそいかかった。サンリク島の海の王、大ダコ様がケンタを食べようとしていたのだ。食べられる直前にケ

ンタは目を覚ましたが、もう手おくれ。

「うわー！」

ケンタがもうだめだとあきらめたその時、目の前に立ちふさがるケンタを守る人のような姿が見えた。ケンタがおそろおそろ目を開けると、大ダコ様の姿は消えていて、ケンタと同じくらいの少年が立っていた。

「やあ、キミ。海でねていたら危険だろ。」

「き……きみはだれだい？」

「ぼくはゲンだよ。よろしくね。キミは？」

「ぼくはケンタって言うんだ。助けてくれてありがとう。」

ゲンはケンタよりも二才年上の十四才。年が近い二人は、すぐ仲良くなった。ゲンはぼう険の旅の中だった。行方不明のおじさんを探しているという。

翌朝、二人で旅を再開した。しかし、昨日大ダコ様におそわれたので、肝心な船が崩れそうになっていた。それを見てゲンが言った。

「ぼくなら、こんなの朝飯前さ。それっ。」

一瞬で、船が作りたてのように直ってしまった。ケンタは何が起こったのか分らず、ただ目を丸くした。

「うーんと、言うの忘れていたけど、ぼくは魔法の国の王子ゲン。魔法使いなんだ。」

ケンタは、おどろくことしかできなかった。

ゲンが魔法で直してくれた新しい船はホレイ島へ順調に進んでいた。ホレイ島に上陸しようとすると、許可できないと言われた。島で殺人事件が起きたというのだ。島に入れないとなると、両親を探すことができない。するとゲンが、

「こんな事件、パツと解けないの？それっ。」

と声をかけた。すると、その現場にいた探偵の男がぺらぺらと推理を話し、犯人を言い当ててしまった。

「さっ、これで島に上がれるよ。」

と何事もなかったかのようにゲンが言い、ケンタを船からおろした。

いよいよ、巨人のいる島へ上陸した。しかし、島を囲んでいたどす黒いかげがケンタたちをさまたげるように体にまとわりついてきた。すると、道ばたに何か光るものがある。近づいてみると、その光がきらきらとかがやき、ケンタたちを包みこみ、その黒いかげをはね返したのだ。光のもとを見たゲンが、

「こ、これは聖者のやりだ。まさかこんなところにあったなんて……。」

とおどろいた。すると、そのやりがケンタにいきなり話し出した。

「わたしは聖者のやりです。わたしはあなたを勇者だと信じます。さあ、わたしをお持ちください。」

ケンタは何が何だかわからず、おどおどしていた。ゲンがその様子を見て、

「ケンタ。このやりは魔法のやりだ。必ず役に立つ。そのやりを信じるんだ。」

それを聞いたケンタは光をおさえたやりをにぎりしめ、島のおくへと進んでいった。

しばらく進んでいくと、道の真ん中に丸くて黄色いものが落ちていた。ケンタは不思議に思っ、それを拾おうとすると、その丸いものは上空にうかび、なんとケンタの持っていたやりのえの部分にスポッとハマったのだ。

「この丸いものは何？」

「これは、わたしと連動する『神の石』です。わたしといっしょになれば最強当然。」

と言ったのと同時にやりが光りかがやきました。そのやりを持って、また前に歩き始めた。

前方に家のた。その中には両親が事故にあう前に、ケンタたちが住んでいた家もあった。

「なあゲン！うちが見えるぞ！」

とさけび、家に向かって走っていった。

「だめだ！それはわなだ！」

とゲンがさげんだ。ケンタがゲンをふり向いたとき、家の庭先からイバラがのび、ケンタの足にからんでき

たのだ。ケンタは身動きがとれない。

「お前が代わりに探して来てくれ！」

とケンタはやりをゲンにたくした。

ゲンは巨人がいるとされる館に着いた。中に入ると、うす気味悪く、くもの巣があちこちにあった。足元をしのばせ、おくへ行くと、

「助けてえ…助けてえ…。」

とうなり声が聞こえた。そつと近くに行くと、おりの中に人がいた。よく見ると、男の人が倒れている。

「あれ？あなたはもしかしてトヨシマおじさん？何でつかまっているの？」

トヨシマおじさんはゲンの魔法の国の勇者だった。だが、あるとき巨人によってさらわれ、このおりの中に閉じこめられていたのだ。おりには複雑なかぎがかかっていて開けられない。するとやりが、

「わたしが開けましょう。」

と言ってぴかっと光り、やりがかぎに変わった。ゲンはそのかぎでおりを開け、トヨシマおじさんを助けた。

一方、ケンタはイバラと格闘していた。イバラは固く、きつく、なかなか外れない。だが、急にイバラがゆるみ、ケンタは穴のようなものに落ちた。後ろをふり向くと、そこには小人たちがいた。

「わたしたちがあなたを助けたのは他でもない。わた

したちの姫がこの巨人によって眠らされている。そのためには魔法の鏡が必要なのです。」

魔法の鏡は勇者を映すという。鏡の間には何万という鏡があり、小人たちは本物を見つけることができずにいたのだ。ケンタがやりを持っているのを小人たちは見たらしい。ケンタは鏡の間に入り、本物の鏡を見事に見つけ出してやった。すると、何だか不思議なドアがケンタの目の前に出てきた。小人が、

「助けてくれてありがとう。このドアを開ければ、あなたの友達と合流できる。」

そう言われ、ドアを開けると、なんと本当にゲンがいた。ケンタはゲンの姿を見て、うれし泣きした。

「さあみんなで前に進もう！」

不思議とみんなでいると、こわさが無かった。すると前からズシン：ズシン：と歩く音が聞こえる。そして、目の前に巨人が現れた。

いよいよ巨人とケンタたちの闘いが始まった。いきなり巨人がパンチをしてきた。パンチの圧力は強く、逃げ切れなかったトヨシマおじさんを吹き飛ばした。身動きができずにいたトヨシマおじさんをゲンが魔法で助けようとしたが、巨人には魔法が効かない。巨人は、ゲンとトヨシマおじさんをつまむと、ペロリと丸のみしてしまった。そのとき、ゲンが持っていたやり

が巨人の足元に落ちた。

（あのやりをとり返さなければ）

ケンタは助走をつけて一気にやりに向かってすべり、やりをにぎった。その勢いで壁を使って反動をつけて、ジャンプした。

「ケンタ背中だ！」

とやりがさけび、剣に変わった。ケンタは巨人の背中を剣で真つ二つに切ると、

「ウギャー！」

巨人はさけび、とけてしまった。すると、巨人のなかからゲンとトヨシマおじさんがでてきた。

「助けてくれてありがとう。ケンタ、きみの両親はこの館の最上階に眠っている。このかぎを持って行くんだ。」

「このかぎは：：？」

とケンタが聞くと、

「巨人の体の中にあつた。」

「わかった！ありがとう！」

ケンタはゲンとだき合い、最上階に続く階段を上った。

そしてついに、お父さんとお母さんがいる部屋にいた。そして、おそろのおそろドアのかぎを開けてみると、部屋の真ん中に二人がねむっていた。ケンタはやつと会えた両親に手をかざした。すると、ねていた両親

親が目を覚ましたのだ。ケンタは思いっきりだきついた。

あれから二年がたった今、ゲンは魔法の修行に出ているらしい。魔法のやりは巨人の館で悪者が入りこまないように守っているという。そして、ケンタは、お父さん、お母さん三人で仲良く暮らしている。

まほうの言葉

末崎小学校六年 宮崎 倫

「はぁ、あ、おはようミーナ。」

「ニャー。」（おはよう）

今、挨拶をした女の子は、小学五年生のラミです。一見、普通に見えるラミは、実は魔女です。魔女学校は、今、夏休み中です。

「ねえ、ねえ、ミーナ、今日は、キキの家に遊びに行こう。」

「ニャー。（うん、行こう）」

キキはラミの友達で、物知りで賢く、いつも冷静な女の子です。おうちよこちよいで天然な所があるラミとは、真逆の性格です。

《ピンポン》

「キキ、遊びに来たよ。」

「はいはい。あ、ラミじゃん。遊びに来てくれたの。ありがとう。ちょうど、クツキを焼いていたところなの。あっそうだ。今から一緒にピクニックに行こうよ。」

「それ、いい考えだね。」

「それじゃあ、どこに行く？」

「ん、あ、人間界がいいんじゃない。」

「そうだね。行っただけに宿題もしよう。」

魔女学校の五年生の夏休みの宿題は、『人間を一人幸せにする』ことです。

「それじゃあ、さっそく、ほうきに乗ってレッツ・ゴー。」

しばらくして、人間界に着地した二人。

「ここ、どこだろう？」

「海が広がっているよ。」

「あれ、ミーナがいない。」

「えっ、どこかにおいてきつちやったのかな？」

二人は、ミーナを探し出しました。

「ミーナ、ミーナ、どこにいるの。」

「ミーナちゃん、どこ。」

そのときです。ゴーツ、グラグラグラッ。

「きゃー、何この揺れ。」

「わたし、聞いたことがある。人間界では時々、『地震』って言われる揺れがあつて海の水があふれてくるつて。それを『津波』って言ふんだつて。」

「てことは、ミーナがおぼれちゃうよ。すぐに探して、助けなさいと。」

すると、どこからか声が聞こえてきました。

「ママー、パーパー。」

男の子の声がします。

「どうしたんだろう。大丈夫かな？」

「ラミ、今はミーナを探さないと。」

「でも……じゃあ、ミーナのことを見つけてから男の子の所に行つていい？」

「うーん、津波が来る前だったら……。」

「やったあ、それじゃあ、すぐにミーナを探そう。」
十分後、

「あつ、ミーナがいたよ。」

「何で屋根の上にいるのよ。」

「多分、津波が来ることが分かつていたんじゃない。」

「すごい。ミーナ、すぐ助けてあげるからね。」

「おいで、ミーナ。もう、ほうきから落ちないでよね。」

無事ミーナを見つけ助け出しました。

「さあ、男の子の所にいきましよう。」

男の子が泣いています。理由を聞くと、男の子のパパとママが家の下敷きになっているようです。

「助けて、お姉ちゃんたち。」

男の子が言いました。

「よし、行こう。家まで案内して。」

しばらく行くと、柱が壊れてぺっちゃんこの家がありました。そこには、女の人と男の人が家の下敷きになっています。

「どうしよう、こんなに重い家をどうやって持ち上げればいいんだろう？」

「そうだ、宿題の『お助け魔法』を使えばいいんじゃない。」

「いい考えだね。それじゃあ、わたしが家を持ち上げる魔法をかけるね。」

『ラッタマレーラ、家よ、持ち上がれっ。』

ラミが呪文をかけると、家が持ち上がり二人の体が出てきました。

「やったあ。キキ、二人の怪我を治してあげて。」

「うん、『ラッタマレーラ、二人の怪我よ治れ』」

呪文をかけると、みるみるうちに二人の傷が消えていきます。あつという間に体の傷が治ってしまいました。

「大成功！」

ラミとキキは大喜びしました。

「きみ、お母さんとお父さんは、もう大丈夫だよ。」

「すっごーい、お姉ちゃんたち。ありがとう。」

「ありがとうございます。お陰さまで助かりました。」

男の子の両親もお礼を言いました。

「もうすぐ、津波が来ると思っています。あなた達も一緒に避難しましょう。」

避難所に到着すると、そこにはたくさんの方がいました。避難所からは、家や車が流されていくのが見えませんでした。

「こわいね。」

と、ラミが言いました。

「そろそろ、家に帰ろう。」

とキキが答えます。

「クッキーは、家に帰ってから食べよう。」

「うん、分かった。」

二人の話を聞いていた男の子が言いました。

「お姉ちゃんたち、もう帰っちゃうの？まだ、一緒にいてよ。」

でも、ラミとキキは家に帰る決心を変えませんでした。

男の子に強くたくましくなってほしかったからです。

「うん、分かった。また、会えるよね。」

男の子が言いました。

「いつか、また会えるよ。きつと。」

「じゃあね、元気だね。バイバイ。」

「バイバイ。」

家に帰る途中、ほうきの上でラミとキキが話しています。

「大丈夫かな……。」

「何が？」

「あの男の子、さびしくないかな。」

「大丈夫だよ。強い男の子だったもん。」

「そうだね。」

「今度、男の子に会うときには、もっともっと元気になっていくよね。」

「ミーナもそう思うよね。」

「ニャーニャー。」（この町もあの男の子も元気になっていくよ）

「よし、宿題も終わったし、家でクッキーを食べてゆつくりしようね。」

家に到着すると、出迎えてくれたキキママが

「ピクニックどうだった？」

と聞きました。

「クッキーは食べられなかったけど、男の子に会ったし、たくさん町のの人に会ってきたよ。宿題も終わったよ。」

「そう、良かったわね。それじゃあ、クッキーに合う

紅茶を入れるわね。」

「やったー、ありがとうママ。」

机の上に、おいしそうなクッキーと紅茶が置かれました。

「おいしそうだね。」

「いったただっきまーす。」

「キキの作ったクッキーも、キキママの入れた紅茶もおいしいね。」

「ありがとう、ラミ。今度は、十年後、男の子の所にまた行きましょう。」

「そうだね。楽しみだなあ。」

「今度は、マカロンを作っていこう。」

「覚えてくれるといいね。」

二人は、顔を見合わせて笑いました。

大好きな大船渡

末崎小学校六年 小松 真菜

私は、愛知県から大船渡市のおじいちゃんとおばあちゃんのお家に遊びに来た杏梨です。お母さんとお父さんと妹と一緒に新幹線で遊びに来たんだ。

「うわー、久しぶりだなー。」

「本当、四、五年ぶりね。」

「あれ？知らないものが建ってる。お母さん、あれ何？」

「何だろうねー。……あつ、あれはおばあちゃんの知り合いの店だよ。『レオン・ルル』っていうメイクサロンよ。」

「ふうーん。」

たしかに、大船渡の町が一変した。四、五年前にあった建物がない。どうしてだろう。すつごく便利だったのに。

「あつ、じいじとばあばだよ。姉ちゃん。」

「あつ、本当だ。じいじとばあばだよ。」

「じいじー、ばあばー、久しぶりー。」

私たちは、じいじとばあばに向かって手をふった。

「おおお、杏梨と希梨だよ。よく来たなー。四、五年ぶりだ。」

やつとじいじとばあばのところに着いた。《長い旅》だったなあー。

私たちは、二十五日間の夏休み。そのうち、最初の日に大船渡に来て、最後の日に愛知に帰るんだ。二十三日間、じいじとばあばの家に泊まるから、いろんなことを話したいな。

「じいじ、ばあば希梨ね、小学一年生になったよ。姉ちゃんは、小学四年生だよ。」

「そうなの！ずいぶん、大きくなったねー。ばあば、びっくりしちゃった！ウフフツ。」

お話しているうちにじいじとばあばの家に着いた。みんなは、『わあっ』とびっくりした。

「すっごーい、超りっぱ。」

「いいなあー。こんな所に住めるなんて。希梨、ずっとここにいたいよ♡。」

前のお家は、もつと海の近くにあったのに、こんなに上の方に建っている。何かあったのかな？

「じいじ、ばあば、どうして大船渡の町はこんなに何もなくなったの？前にじいじと行ったお店がないよ。」と、私が言うと、じいじとばあばの表情が急に暗くなった。

「・・・あとでお話するよ。杏梨も大きくなったからな。ま、とにかく無事に着いてくれて良かったよ。」

そして、家の中に入り二階へ案内された。

「ここが杏梨たちの寝る部屋よ。」

杏梨と希梨は、目を大きくあけて、口をぽかんとあけて部屋をながめている。二人とも言葉が出ない。「すてきすぎるよ。こんなところに二十三日間も泊まっていたいの？」

「いいんだよ。あなたたちのために用意したんだから・・・。ね、おじいさんっ。」

「おっおう。」

そんなこんな話しているうちに、あつという間に夜になってしまった。

「さあ、ごはんよー。早く来なさい。」

「はあーい。」

「おつ、チャーハンかあ。うーん、うまそう。」

「チャーハン、チャーハン、チャーハン♪」

「ささっ、いただきますよ。」

「いただきます！」

みんな一斉にお箸を持って、おいしくチャーハンを食べ始めた。パクパク、モグモグ、ゴックン。ごちそうさまー。

希梨が一番風呂に入りたくて風呂場へ走り込んだ。

私は希梨と一緒に風呂に入った。

「はあー、気持ちいいね。」

「そーだね。」

一日の疲れがすーっと消える感じがした。二人で歯磨きもした。ゴシゴシ、シャカシャカ、ガラガラ、ペツ。

私は二階へ上がり、布団に入った。ZZZー。

こんな楽しい日が続いたある日、私たちは着替えて一階に下がった。

「ママ、おはようございましゅ。」

「おはよう、杏梨。じいじとばあばが呼んでたよ。『お

座しき』に来てだつて。」

「うーん。何だろう。」

私は考えながらお座しきに向かった。

「じいじ、ばあば？」

「おう、杏梨、こっちにおいで。」

私は、じいじとばあばの間にすわった。

「ねえ、お話つてなあに？」

「…杏梨、前に何で大船渡の町が何もなくなったの
つて言っただろう。」

「…うん。だつて何も無いんだもん。」

「そーだよな、杏は、知らないもんなあ。実はな、四
年前に大きな地震と大きな津波があつたんだよ。それ
で、たくさんの人が亡くなって、たくさんのお物を失っ
たんだよ…。」

「…だから、町がなくなつたんだ…。」

「当たり前毎日が、一瞬にしてこわれてしまった。
じいちゃんのお友人も近所の人も波にのまれて亡くなっ
てしまった…。」

じいじは、目を真つ赤にしながら話をした。水も出
ない、食料もガソリンも手に入りにくく、電気もつか
ない真つ暗な夜が何日も続いたつて…。でも、全国
各地から支援があり、みんな必死になつて不自由な生
活を乗り越えて生きてきたんだつて。正直、私は『海

はこわい』と思つてしまった。そう言えば、おじさん
の船に乗つて釣りをしたり、いとこ達と海で泳いだこ
ともあつたのに…。じいじやママの生まれ育つた町。
今は、岸壁の復興工事で近づくことも出来ない。じい
じとばあばの新しいお家は、海の見える高台に建つて
いるんだ。ここは、緑があつてシカやリス、たくさん
の虫や蝶、小鳥たちが遊びに来る。ばあばは、花を植
えたり、畑で野菜を作つて自然いっぱい場所。
周辺には、新しいお家が次々と建てられている。私は、
碓石海岸や五葉山、たくさんいい所があるこの町、大
船渡が大好き。愛知に帰つたら、たくさんの人達に大
船渡のことを話そうと思つた。将来、私は、この町大
船渡で暮らし、社会に役立つ人になりたい。それまで、
じいじとばあば、長生きしてね。
杏梨もがんばるから♡

《中学生部門》

消えない涙

大船渡第一中学校一年 新沼 由唯

平成二十二年四月三日。俺と妹は、避難場所となつ

た、小学校の体育館を出た。津波が来て、二十四日後の事だった。家も流され、両親は行方不明となつてゐる。俺は、山田灯（ともる）妹は光（ひかり）。俺達は、避難場所で出会い、仲良くなつた、今川夢花（ゆめか）の母の高台にある実家で暮らす事になった。だが、それからの事だった。光は夢花の母の実家での暮らしに慣れていくうちに、あの行方不明になつた両親が夢に出てきて、夜に飛び起きてはわめき出す事が多くなり、さらに乱暴になつてきてしまった。

そんなある日の事だ。

「光。何してんだ？」

光の周りには、スナック菓子やせんべいのゴミなどがたくさん散らかつてあつた。

「何だよ……」

光が俺をにらむと、俺も光をジロリとにらみ付けて「何だよじゃねえし、何なんだよ、この散らかし方は」と言つた。すると先に、「それが？　どうかしたわけ？」と冷たく言われ、腹がたつた俺は光にこう言つてどなりつけた。「ここ、人ん家なんだぞ？　津波で家無くして、夢花の母さんの実家にせっかく居させてもらつてゐるのに、何でさ自分の部屋のようにして寝っ転がつてんだよ！　片づけろよ……」とところが……

「うるさいんだよ！　そんな声で言われると、頭がガン

ガンしてくるんだって！」

そう言われても俺は言い返した。

「片づけるんだ、早くしろ！！　兄の言う事を聞けよ！！」
「うるさああい！！……何なのさ、最近上から目線で私の事どなったりしてさ！！　差別してるのかな？　夢花にもそんなふうに通つてみなよ！！」

俺が小さく「……チツ」と舌打ちをし、「お前なあつ！！……」と言いかけたとたん……

「うるさい、何をまたさわいでるの！？」

また、おばあさんに叱られた……くそ、何なんだよ本当に、光の奴め……

「悪いけど、黙つててもらえる？……ていうか、私、こんな家から出てつてやるもんね、さようなら。」

光が何も持たずに扉を開けて家を出て行つてしまつた。

「おいちよつと待てよ！　家から出て行くなんて、そうはさせないからな！！……ああ、もう！！……」

俺がイライラしながら茶ぶ台がある部屋に行くと、夢花がいた。

「灯……また、けんかしたの……？」

夢花が心配そうな顔をして俺の顔を見ていた。そう言われると、何だか俺が光にあんな事を言つてしまつて、少し申し訳ないような気持ちになつてきた……

「あ、ああ……ごめんね。」

「いや、謝まらなくていいけどさ……どうした？夢花。」

俺が聞くと、夢花の表情はさらにしずんでしまった。

「お、おい！本当大丈夫か！話したい事は今のうちに言えよな……。」

慌ててそう言うと、夢花は口をゆっくりと開いた。

「灯と光の父さん母さんって、見つかってないんだよね？……。」

「……っ。て、でも……そうだけど、夢花は……いいよな、母さん達もいるからさー。」

「兄ちゃんが……。」

「!？」

それを聞いて灯はドキツとした。

「……え……。」

「私の兄ちゃんも、まだ見つかっていなくて……兄ちゃん、優しかったなあ……。歳は二十歳（はたち）くらいだったよ。」

「二十歳……か。歳が離れてるんだな。」

ちなみに、夢花は十一歳。一方、灯は十三歳で、光は十二歳だ。

「兄ちゃん……死んじゃったのかな……うう、それは絶対考えたくないっ!!……うう……。」

夢花は泣き出してしまった。

「夢花！泣くなよ!……あ、できればさ……。」

「うう……ん？何？」

「……兄さんの話、聞かせてほしい……な。」

「……。」

「い、いや、無理して話さなくても……。」

俺がそう言いかけた時、夢花は目をこすりながら「あ、私兄ちゃんの話、一度でいいから、したかったんだよね。」と言い、にこつと笑った。

「……え、本当にいいの？」

「構わないよ。大丈夫。聞いてて……。」

「ああ……うん。」

静かになり、しばらくすると、夢花が口を開いた。

「わたしは、あの日、学校から家に帰って来たところだったの。そしたら、お兄ちゃんが家の茶の間にいた。」

「お帰り、夢花。」っていつもの温かい笑顔でわたしを迎えてくれた。「ただいま。」わたしも、嬉しくてそう言ったの。」

「うん……。」

「お母さんも仕事から帰って来て、三人でゆつたりと過ごしていた。二時四十六分、大きな地震がおきたの。辺りは停電してしまつて、ゆれが三分くらいつづいた。その後、津波警報が出て、わたしと母さんとお兄ちゃんが高台に避難したの。ところが、お兄ちゃんが「す

ぐ戻る。」と言い、家まで戻って行つたの。その数分後、津波が町を襲つてきた。その大きな波が町をわたしたちがぼう然と立ちつくして見ていると、まわりからわめき声や、「母さああん、母さんに会いたいよお」—という力なくさけぶ小さい子供の声がした。その声を耳にして、はつ、と気づいた。お兄ちゃんがまだ戻ってきていない…。お母さんもそれに気づいて、「お兄ちゃん、どうしたのかな、まさか、津波になんて…。」—と言いつつ涙をこぼしていたの…。わたしは、その時「ねえ、そんな事考えさせないでよお、ううう…。」—って泣きたくなつて仕方がなかった…。の…。」

次の日、わたしたちは小学校の体育館に避難する事にして、おばあちゃんとも再会したの。…お兄ちゃんの行方が…分からないまま…。」

話し終えると、夢花は、ぼつりとまた静かになった。俺はそんな夢花の今の話を聞いてて、何だか悲しくなつた。そして…

「夢花、ありがとな…。今から、光を探しに行くけど、一緒に行く…。か？」

そう言つて誘つて、家を出て行つた。高台から町へ下りると、その町はたくさん瓦礫があり、建物もほとんどがなくなつていた。その光景を見ながら、二人で歩いて光を探した。するとその時、「母さあん、父

さあん、おうい」という声が聞こえ、その声のする方向へ行つてみた。その声は、光だった。

「おい、光—!!」

俺は光に思わずさげんだ。

光は、俺達に気づいたのか、ゆっくりこつちを向いた、夢花もさげんだ。

「光、戻つておいでよ—!!」

「光、さつきは悪かつたよ、俺が悪かつたんだ!! 本当…に…ごめんよお」

さけび続けると、光が走つて来た。光の目は涙があふれていた。

「うわああつ、ごめんね!! 兄ちゃん、夢花!! わたしが悪かつた。自分勝手だったの!! 今まで本当ごめん…。ううつ。」

再会して、やっと三人になつて家まで坂を登つて行つた。

四月十日。やっと俺達は学校へ通える時が来た。俺は中二で光は中一、そして夢花は小学六年生になった。教科書などは流されてしまつたが、たくさん支援を受け、学校も少しずつ生活を取り戻しつつあった。俺と、光と、夢花は震災で失つてしまつた物や人々、全ての想いをつめた、プロジェクトをこつそりと作つて

いた。学校が始まって以来、そのプロジェクトでは、復興のための活動をできる事を、俺達、そして町の子供たちと手伝いしていくものだ。そのプロジェクトの名前は「消えない涙」。この言葉の意味は、あの日亡くなった人々の分を生きる気持ちを込め、震災で辛い想いをしながらも、今こそ乗り越えよう、と。この提案をしてくれたのは、地元の人達だった。大人達も、このプロジェクトを受け入れてくれたのだろうか。提案してくれた時、何げなくほほ笑んでいた……。

「灯、光！このプロジェクト、結成したかいがあったね！」

「そうだねっ、地元の子供達も協力してくれているし！しかも、七歳の子も来てくれてるし、すごいなあ……。」

「よし、今日も頑張るか、二人とも！」

「うん！、ああそうだ。」

光が、ポケットからふくろを取り出した。

「ん？それ何だ？」

『「消えない涙」プロジェクトの証とする、ミサंगाだよ。みんなで付けるの！』

「へえ、それいい！」

「これなら、協力してくれている子供達も、もっと元気出るな。いいアイディアだな、光。」

「えへ……。」

ミサंगाを配ると、子供達は喜んでいた。

「うわあい、赤だあ」

「可愛い！」

「お姉ちゃん達、ありがとう！」

「これ、うでにつけるね。」

子供達を見ていると、俺達はさらに元気がわいてきた。その後も、プロジェクトを続けていった。

震災から四年。俺、灯は高二。光は、高一になり、夢花は中三となった。勉強で忙しくなつて、プロジェクトの参加は休日に行く事になっていた。

「夢花は、受験生か。」

「うん。それでもプロジェクト、続けるよ。」

「わたしも。」

ある休日に、プロジェクトに行ってみたが誰もいなかった。「おかしいな、何してんだろう」と、辺りを見回すと、子供達がかざりをつけた大きなかんばんを遠くから掲げながら、こちらに走ってきた。

『「消えない涙」プロジェクトのあの日を忘れないために、今語り継ぐ』？……

読むと、かんばんには、そう書かれていた。

「どう？これ。」

「かっこいいでしょ。」

「わたしたちで、作ったんだあ！」

子供達が目を輝かせてそう、一人一人言っていた。俺達は、感激して涙が止まらなかった。これまで、このプロジェクトを続けて来て、良かったんだ：：想いがきちんと伝わっていたんだ：：。

涙をふき、今日も灯、光、夢花、そして子供達はプロジェクトを実行している事だろう。

復興へのかけ橋

日頃市中学校一年 鈴木 花琳

キーンコーンカーンコーン。授業終わりのチャイムがなった。

「やったー。部活だ！」内海亜衣は授業終わりの疲れを感じさせない元気な声で言った。

「そんなに部活が楽しみ？」と小野寺夕日は聞き返す。

「うん！めっちゃ楽しみだよ」と、うきうきした足取りで部室に向かう。

大船渡市立青海中学校ボランティア部部室。

「ガラガラガラガラ」

「おそいぞ！亜衣、小野寺」と少し怒った表情で山田悟。

「その通りですよ。内海さん、小野寺さん」

と雪ノ下恵先生。

「はーい。すみませんでした」と亜衣が反省の表情を見せずに言う。

「それで、先生。話というのは？」と落ちついた表情の夕日。そうボランティア部の三人は雪ノ下に呼び出されていた。

「あつ、はい。ごっほん。大事な話ですからよく聞いてくださいよ」

「なんと：：募金活動をする事になりました」

「えー。いつも通りじゃん」と亜衣が文句を言う。

「そんな事なんですよ。場所は東京ですよ」

「えっ。本当なんですか？先生」と悟がおどろいた表情で言う。

「やった！東京だ」

「言っておきますけど、これは遊びじゃないですよ。

れっきとした部活動なので観光は一切なしです」とみんなを見回しながら雪ノ下が言った。

「えー。もったいないな」と亜衣。

「雪ノ下先生。いつ行くんですか？」と悟が亜衣の話を断ち切り聞く。

「えーっと、今週の土曜日朝六時集合の、解散は日曜日の午後二時ぐらいですね」

「って事は……お泊まりじゃん。準備しなきゃ」とあわてて話も聞かずに亜衣は部屋を出て行った。

「亜衣ちゃん。まだ部活終わってないよ」と夕日が亜衣を追いかけていった。

翌日

キーンコーンカーンコーン。と授業終わりのチャイムになる。

「フンフンフン」

「部活楽しみ？ 亜衣ちゃん」

「うん。だってー東京だよ」とあたりまえの様に亜衣は言う。

部室

「今日は、募金活動について必要な事を説明します」と雪ノ下はプリントを見ながら三人に伝える。

「まず私達は東北参加校として参加します」

「え！ 私達以外も行くんですね」と夕日。

「東京に着いたら三つのグループに別れて募金活動を行います」

「はいっ」三人は元気に返事をする。

「うん。グループは、Aグループは内海さん、Bグループは小野寺さん、Cグループは山田君にします。各グループ頑張ってください」

「そして最後に募金ではプラカードという看板のよう

なものを使うそうなので作ってくださいね。それでは」と雪ノ下はスタスタと職員室へ戻っていった。

「うん。プラカードかあ」と夕日は悩む。

「どういうデザインにする？」と悟。

「やっぱりカラフルにしよう！」

「分かった。とりあえず、図にしてみよう」

「うん」と亜衣は明るく言う。

翌日 部室

「ふう、やっと図にできたね」と夕日が二人に言う。

「ああ。後は色をぬるだけだな」

「よしっ。色ぬりは私に任せて！」と亜衣は自信満々に言う。

「ええー。明日出発なんだから失敗しないでね。亜衣ちゃん」心配そうに夕日。

「任せなさいっ！」

翌日

「はあ。昨日まさか、あんな事になるなんてな」悟は愚痴をこぼした。

「私だって、分かってたらやってないよ」

「まあまあ、それじゃ出発しましょう」と雪ノ下が言った。

六時間後 東京

「東京、暑い、暑すぎる」

「暑いのでまずホテルに向かいましょうか」雪ノ下は何の迷いもなく細い路地を通っていった。

「先生本当にこっちで間違いないんですよね」悟が心配そうに聞く。

「ええ、間違いないですよ」真剣な顔で言う。テクテクテク。

「けっこう歩いた気がする」と珍しく夕日が息を切らす。

「あつ、見えました。ホテルです」と雪ノ下が言うと、三人は喜びの表情を浮かべる。

「すいません。遅れました」ホテルロビーで待っていた人達に声をかける雪ノ下。

「じゃあ、グループに別れて。募金に行きます」

「Aグループは上野公園、Bグループは築地本願寺、Cグループは築地市場で行います。それぞれのバスに乗ってください」と三人は伝えられ行動する。

「じゃあ、お互い頑張ろう！」

Aグループ 上野公園

「募金よろしくお願いします」

「被災地復興のためにご協力お願いします」と亜衣が人一倍声を出す。

「募金よろしくお願いします」と亜衣のとなりから聞えてきた。

「あのー」と亜衣が声をかける。

「はっはいっ」

「あ、おどろかせて、ごめん。私、内海亜衣って言います。よろしくね」と手を出す。

「あつ、はい。こちらこそよろしくお願いします。私は新沼千花と言います」と握手をする。

「あははっ。緊張しすぎだよ」と笑う亜衣。

「あつごめん。一緒に頑張ろう」と千花。

「もちろん！」

「募金によろしくお願いします」

Bグループ 築地本願寺

「ご協力ありがとうございます」と募金をしてくれた人にお礼をする。

「ねえ。夕日さん、ここ人通りが多いから、楽ですね」と夕日と友達になった美空が言う。

「確かにね。そういえばプラカード使わなきゃ」と言いプラカードを出した。

Cグループ 築地市場

「人はたくさんいるのに、募金する人がいない」と悟が一人でつぶやいていた。

「もうプラカードの意味がないな」

チャリン。一人のおばあさんがお金を入れてくれた。「このお金は何に使うの？」と悟に向かっておばあさ

んが聞く。

「えっと、まず僕が住んでいる地域の仮設住宅を住みやすくするために使おうと思っています」

「そう、えらいねえ」と百円玉をもう一つ入れてくれた。

「ありがとうございます」

ホテル

「ねえ、亜衣ちゃん募金どうだった？」

「うんとね、いっぱい友達できたよ。楽しかったな」と亜衣は答える。

「夕日はどうだったの？」

「私も楽しかったな」と夕日。

「じゃあ、山田君は？」

「うれしかった、かな」と答えた。

「何それ、すごく気になる」と亜衣が言う。

「みなさん。お疲れ様です」と雪ノ下が三人に言う。

「あつ、雪ノ下先生」

「みなさん、募金活動どうでしたか？」

「私はBグループのみんなと協力できてよかったです。」

と夕日。

「僕は、あまり募金をしてくれなかったけど、募金をしてくれた人に声をかけてもらうのがうれしかった。」

と悟。

「私は、とにかく楽しかった」と亜衣がさけぶ。

「うん。よかったです。そういえば、この募金何に使うか決めていませんでしたね」

「仮設住宅へのプレゼントがいいと思います」

「えー。じゃあ、校庭が使えない学校に中で遊べる物を買ってあげようよ」

「いっそ、保育園や幼稚園に本を贈るとか」

「分かりました。月曜日の部活で会議しましょう」と雪ノ下。

「はい」と亜衣が返事する。

「あつ、そうそう。大事な事を忘れていました」

「えっ何なに？」

「十月頃に東京の学校のみなさんが大船渡に来る事になりました」

「えっ、本当に」と喜ぶ亜衣。

「なので、私達の学校について紹介したいと思います」

「よしっ！学校に帰ったら、さっそく会議だ」と亜衣。

「もちろん。頑張ろうね」と夕日。

「当たり前だ。亜衣しっかり仕事しろよ」と悟が心配そうに言う。

「分かっているって」と亜衣。

「まあまあ。明日は朝早いので部屋に行ったらすぐね

てくださいよ」

「はーい。じゃあまた明日」と元気な声が星空に吸いこまれた。

「私達は復興のかけ橋になれるのかな」亜衣は、つぶやいた。

みんなの願い

日頃市中学校二年 鈴木 裕也

うおろうは、のん気な性格で、いつものんびりとしている。そばにいただけで、心がおだやかになる。

うおすけは、何事にも積極的で、みんなは、いつも頼りにしている。相談ごとには、必ず答えを出してくれる。

ぎよぎようおは、意地っ張りで、何か不利なことがあるとすぐに叩く。力があるだけに少し、迷惑している。でも、いざとなった時は、頼りになる兄貴。

僕は、うお太。みんなはがんばり屋と言ってくれる。「すぐやる。できるまでやる。」が口ぐせで、物事を必死になって取り組む。時々、ぼうっとしているところも、いいらしい。

「おーい、うお太、うおろう、ぎよぎようお、今日もおにごっこで遊ぼうぜ。」

うおすけくんが呼んでいる。いつもの光景だ。

ぼくが住んでいるのは大船渡の海の中、ぼくたちがよく遊ぶのは、岩や貝やわかめなど、自然豊かなぼくたちの楽園。ぼくたちは毎日ここでのびのびと遊んでいる。

「おーい。うお太、なにぼうっとしているんだよ。おまえが鬼なんだぞ。」

ぼくは、必死になって青い海を泳いだ。やっこのことで、ぎよぎようおくんをさわった。

「ぎよぎようおくんが鬼だよ。」

その瞬間、ぎよぎようおくんがぼくを自分のヒレで力強く叩き付けた。

「うお太、おまえがまた鬼だ。」

ぎよぎようおくんはとても力が強くて、少し怖いところもあるけど、ぼく達の中では一番頼りになる兄貴。

ぼくは、今度はうおろうに狙いを定めて泳いだ。その結果、無事にぼくは、おにから解放された。

うおろうは、うおすけにむかって泳ぎだしたが、うおすけは泳ぎが速くて、泳ぐのが遅い小さなうおろうにとって、不利だった。

結局、うおろうは、うおすけに追いつくことができずに、おにごっこは終わった。

するとすぐに、うおすけが、

「次は、かくれんぼしようぜ。」

と言ってすぐにかくれんぼが始まった。はじめに探すのはうおすけ。

ぼくは、2番目に見つかった。そして、最後まで残った小さなうおろうを探そうとしたそのとき、海が揺らついた。今まで感じたことのない揺れだ。地震だ。そのとき、一つのうおろうぐらいの岩がバランスをくずしてたおれた。

岩の下には、うおろうがいた。岩の下敷になってもがいている。

それを見てすぐにぎよぎようおが、

「うおろう、今助けるからな。」

と言って、岩をおもいつき叩き付けた。しかし、岩はびくともしない。すると、すぐにぎよぎようおが、言った。

「おまえら、みんなでこの岩を持ち上げるぞ。」

ぼく達は、岩のまわりをとりまき体全体を動かし岩を持ち上げようとした。ぼくはそのとき、「うおろうを助けるぞ。」と思っただけで、うおろうがでてきた。みんなで声をあわせて持ち上げた。

「お、重い。」

「がんばるんだ。うおろうの命がかかっているんだぞ。」

「うおおー。」

少しずつ持ち上がっていく。こんなに重いのにどんどん持ち上がっていく。

ぎよぎようおがおもいつき、尾でうおろうをはね飛ばして、岩の下からどけることができた。

「うおろうは。」

と言い、小さなうおろうに駆け寄った。

うおろうは、尾びれが少しえぐられたようだ。うおろうは、生きていた。

「良かったなあ。」

という言葉が不意に口からでた。そのとき、僕は、涙がでそうになっていた。

どれくらい経っただろう。うおろうの容体がよくなくなり始めたとき、うおすけが、

「元気になったら、かくれんぼの続きをやりようぜ。」と言った。

それには、はやく元気になってまた、遊ぼうというみんなの願いがあった。

今の船渡も魚たちのように動いている。

あれから十年。うお太は、なんでも必死になって取

りくんだおかげで、魚の学校の頼りになる先生になった。うおすけは、将来の夢にむかつて積極的になんばるようになり、魚の世界では指折りの弁護士になった。ぎよぎようおは、勇敢でここぞというときに、頼りになる力持ちで、ちよっぴり優しい海の警察官になった。うおろうは、相変わらずのんきだが、目標をもち、何事にも力いっぱい取りくんで、わかめを売る会社の社長になった。

こうして大船渡の海は、活動が盛んになり、豊かになり始めた。このように、大船渡も活動が盛んになってほしいとぼく達は思った。

希望の花

日頃市中学校二年 村上 来未

僕の家は大船渡市にある二階建ての青い屋根。青く光る海がとてもよく見えて、僕はここが大好きだった。青い屋根の下には、僕の家族が住んでいた。みんな明るくて優しく、僕の家はいつもにぎやかで楽しかった……。

もう一度あのきれいな海が見たい。
今は無き我が家で、今は亡き家族と――。

はあ。深いため息をついた。ノートの左上に書いた日付がそうさせた。

「どうしたんだよ。拓海（たくみ）。」

僕の名前は拓海という。海が大好きだった両親がつけた名前だ。僕も良い名前だと思い、気にいっていた。

「おい！拓海！」

バシッ！と大きな音を立て、僕の頭ん中が揺れた。

「痛っ！！……なんだよ？優。」

優は僕の友達だ。クラスのムードメーカー的な存在で、いつもまわりを明るくする。

「いや。お前いつもとなんか違うなー。と思つてさ！

……なんかあったのか？」

「別に？なんでもないけど。」

いつもよりやけに深刻そうな顔をして聞いてきたけど、その顔がおもしろくて笑ってしまった。

「よおし。じゃあ二人とも……さっさとノートを書け！！

無駄話……声がでかすぎる！！授業の邪魔だ！！」

先生のいつもよりやけに怒った顔も最高だった。思わず吹き出してしまったが、気づかれなくてよかった。

そうして、いつものように授業をして、六時間目になった。僕はとても憂鬱になっていた。あのときの話なんて、とても聞く気にはなれない。

全校生徒が体育館に向かって列を作っていた。そのとき、

「また暗い顔してんなー。」

そうやって僕の顔をまじまじとのぞきこむ奴がいた。

そいつは優だった。

「なんだよー。ただの追悼式だぞ？ 悲しいことなんかなにもないだろ？」

その言葉に、僕の怒りは頂点に達していた。

「うるさい!! 悲しいことなんかなにもないだと？ 僕は今でもずっと悲しいんだ!! お前みたいになんかへらしている奴と一緒にするなよ!! お前に何が分かるんだ!!」

まわりが一気にしーん……と静まりかえった。優は何かを察したかのような顔をし、呆然と立ちつくした。

そんな優をおもいきり睨みつけ、僕は体育館へ向かった。

今日は三月十一日。僕の全てが奪われた日。

体育館では、誰一人話そうとする人はいなかった。

校長先生がステージに立つ。

「皆さん、今日は三月十一日です。あの東日本大震災からもう一年が経ちましたね――。」

校長先生は海辺の学校で自分の体験したことを涙なが

らに話していた。

僕はこれ以上その話は聞けなかった。胸がドキドキして具合が悪い。先生を呼んで、保健室に行った。優が心配そうな顔をしていたが、もうあんな奴のことなんか知らない。僕は保健室のベッドに倒れ込むなりすぐ眠った。

何もない真っ白な部屋で、僕はテレビを見ていた。テレビには、あの忌まわしき僕の過去が映っていた。ウー……。ウー……。サイレンが鳴り響いた。僕は中学校の近くの高い高い山にいた。誰もが不安そうな顔をしていた。

「来たぞ!」

海の底から、大きな、大きな、真っ黒な、真っ黒な化け物はいあがってきた。

僕は背筋が凍りついた。化け物はどんどん町を飲み込んでいく。僕が大好きなあおのきれいな海、青い青い穏やかなあの海と同じだとは思えないぐらい似ても似つかない姿だった。

化け物が町を飲み込んでいく姿は、小さい頃に見た戦隊ものの番組の、怪獣が大きくなってビルを踏みつぶしているシーンと似ていたが、こちらの方が恐ろしいと僕は感じた。すっかり見慣れた故郷の景色が破壊

されていたからだろうか。

僕ははっとした。化け物の目の前に僕の家があった。きれいな海がよく見える家。僕はただ何かを叫ぶことしかできなかった。それも虚しく、化け物は僕の家を飲み込んだ。そういえば、体が弱く寝たきりのばあちゃん、ひどい熱で保育園を休んだ妹の七海が家に居た気がする。

僕は行くあてもなくなったので、避難所である体育館へ向かった。叔父さんが僕の居場所を聞きだして、探しに来てくれた。

「拓海！大丈夫だったか!!」

「僕は大丈夫だけど、七海とばあちゃんは……。」

「ああ、分かった分かった、もう泣くな。」

叔父さんはそう言って、泣き出した僕の肩を抱いてくれた。叔父さんは、お父さんによく似ているから一緒にいると安心する。

「叔父さん。父さんと母さんは……?」

叔父さんは、急に暗い顔になって、

「――。」

その言葉が頭の中で響いて、胸が悲しみでいっぱいになり、僕はその場に泣き崩れた。

「みんな、さようなら。」

そこで、テレビの映像は途切れた。これが、僕の忌まわしい過去だ。あの日から、僕は希望を失ってしまった。僕は涙で赤く腫れあがった目をこすって、立ちあがった。

なにか気配を感じて、後を振り返ってみた。そこには、あの大きく、真っ黒な化け物がいた。僕はぞっとして、背筋が凍った。僕は固まったまま、身動き一つとれなかった。

化け物は僕を、その大きな口で、ざぶんと飲み込んだ。

――波の音が聞こえた。目を開けると、青い、穏やかな海があった。誰かが近くにいたから、じっと見つめてみた。すると、

「ん……? 拓海くんか! 久しぶりだなあ!」

その人は優のお兄さんだった。

「学校はどう?」

「もちろん! あ……勉強以外は……。」

「あはは! そうか。元気そうでよかったよ。優とはうまくいってるの?」

「いや……今日けんかしちゃって……。」

「うん、そうみたいだね。」

「……。」

「優はね、俺が死んだ後、無理して笑っているんだ。本当は悲しいのに、忘れたフリして。」

優が悩んでいるだなんて、知らなかった。もしかして、あのときあんなことを言ってきたのも、悲しみを振りはらうためだったのか……？

「おにいちゃん。おともだちとけんかはだめだよ！」

「元氣じゃったかあ？」

「拓海！」

「七海……ばあちゃん……母さん……！」

誰かが背中をバシッと叩いた。

「男なら、自分の気持ち伝えて、ちゃんと謝れ。拓海。」

「父さん……！」

「ずっと心配してたのよ。」

そうして、僕たちは、たくさん会話をした。なんでもないおしゃべりなのに、笑顔が絶えなかった。

「拓海くん。もう時間だ。俺たちはもう行かないといけない。」

すると、みんながぼんやりと光りはじめた。体もすでに、半透明だった。

「あら、もうそんな時間なのね……。」

「まだおにいちゃんとおしゃべりしていたいよお。」
みんな泣いていた。僕も泣いた。

「僕だって、話したいことたくさんあるんだ……！ま

だみんなといたいよ……。」

「大丈夫よ、拓海。私たちは姿こそ、消えてしまったけど、あなたの心の中に、ずっといるわ。悲しいことがあっても、つらいことがあっても、あなたの側に私たちはいるからね。手を出してごらん。」

僕は手を出した。すると、そこには、たくさんの写真と、封筒に入っていたたくさんの花の種が……。

「これを見て、私たちのことを忘れないでいてね、私達はいつも一緒よ。」

「ありがとう……。」

「拓海くん。優にこれを渡してくれないか？」

「……分かった。絶対優に渡すよ！」

「ありがとう。拓海くん。」

「みんな……さようなら……じゃなくて、またね！」
僕はみんなに抱きしめられ、光に包まれていった――

「ごめんな！優！」

「オ、オレもごめん！あんなこと言って……。」

こうして僕たちは仲直りした。

僕は優にさっきの出来事を全て話した。お兄さんか
らと、優に野球ボールを渡した。優は涙ぐんでいた――

僕たちは、放課後、みんなにもらった花の種を植え

た。

八月、そこには立派なヒマワリが咲いた。

僕は今、仮設住宅に住んでいる。ちよつとせまいけど、近所の人達はとても明るいから楽しい。それに、優とヒマワリの手入れをするとき、ヒマワリはいつも太陽を見ていた。

希望に向かって咲いていた――

未来の日頃市

日頃市中学校二年 三条 琉月

これは大船渡市の日頃市町のお話です。

大船渡市日頃市町に太郎という十四歳の中学生がいました。太郎はとても探検が好きでした。みんなで、関谷洞窟を探検しようと言い出し、それを聞いたこわがりの、小太郎八歳はびっくり。「迷子になったら、どうするんだよ。」と小さな声で言いました。

やんちやな吏郎は、「おもしれえーなー。行ってみようぜ。」と言いました。しつかり者の次郎が言いました。「行くからには、ライト、ヘルメット、軍手、おにぎり、水をリュックにつめて行こうぜ。」

こわがりの小太郎は、しつかり者の次郎が持っているものをチェックしているので、少し安心しました。

太郎だけ、とてもうれしそうにしています。「明日の午後一時な」と太郎がみんなに言いました。そして探検の日になり、準備をしてお昼を食べ午後一時になりました。

いよいよ探検がはじまりました。ライトで照らすと、岩はゴツゴツしていて、奥にいくにつれて道幅が狭くなっていきました。順調に進んでいきましたがいつのまにか迷子になってしまいました。どうすればいいのかわからなくなってしまったのです。四人は、でたために歩き回っていました。そしたら出口がみえてきてみんな「やったぞ!」と言ってよろこんでいました。ですが外にでると見たことのないような光景がそこにはありました。よく見てみるとそこは三十年後の日頃市町だったのです。

なぜ未来の日頃市町にいるんだとびっくりもしていますが、しつかり復興しているんだなと思い四兄弟は感動していました。四兄弟はみんな未来の日頃市町を探検することになり、いろんなところを見て回りました。

やんちや坊主で泳ぎが得意な吏郎が見たものは、五葉温泉です。日頃市小学校の二十五メートルプールくらいに大きい、泳いでも楽しそうです。売り場に名物で売っていたのは、「日頃市あげまんじゅう」です。

にわたりの玉子くらいの大きさで、上には砂糖が白くぬってあります。あんこと砂糖のあんばいは、最高です。吏郎は、あつというまに五個も食べてしまいました。

しっかり者の次郎がみつけたのは、鷹生ダムです。そのダムでブラックバスを見ました。ちよつと黒くて、大物は五十センチはあるようです。ざつと見たところ、千びきはいそうです。しっかり者の次郎は、塩焼きにして観光客に食べさせようと考えました。

探検好きの太郎が発見したものは、五葉山の動物達です。ニホンカモシカ、ニホンジカ、ニホンザルなど、追いかけてつかまえてしまいました。太郎は、動物園が好きだったので、日頃市動物園を作ってみたいと思いました。

一番小さなこわがりの小太郎は、日頃市中学校で黒びかりするコイが十匹くらい泳いでいる池をみつめました。近づいてみると、一番大きいコイが、「地震の予知ができるよ。」と言いました。なのでここに地震予知研究所を建てることにしました。

テレビで見るような感じで四人共とてもびっくりしていましたが目を輝かせて見てまわりました。この建物についてたくさん知りたいと、いろいろなところを回って勉強しました。

いかげん家にもどらないとやばいと思ったしっかり者の次郎が「家に帰ろうぜ」と言って家に帰ることになりました。世話になった人達にお礼を言って関谷洞窟へはいっていききました。

でたらめにみんなで歩いていると出口が見えてきました。出口が見えた瞬間みんなとても喜びました。

そして、数年後、四人兄弟は大人になりました。未来の日頃市町で勉強してきたことを生かし地震にも耐えられる家をつくっていききました。日頃市町はとも自然の多い、震災の影響も受けにくいともいいところだと四兄弟はいつていました。

母の笑顔を忘れない

日頃市中学校二年 工藤 美結

「ワッハハハッ」いつも笑いの絶えない家族がいた。それは私の大切な家族だった。父の武は四十五歳の海産物問屋に勤める。母のけい子は、四十二歳の気仙銀行員、兄の友希(ユキ)は三陸高校二年生の十七歳、そして私青羽(アオハ)、中学一年の十三歳。家族四人よく笑いとても仲がよく、何不自由なく幸せな生活をしていて。しかし、楽しい一時は一瞬にして消えさって

しまった。

あの日、私達家族はいつものように、父と母は職場へ行き、兄と私は学校へ行った。五時間目まで終わり、六時間目が始まるうとしたとき、急にクラスが鳴き始め、電線に止まっている。いつもの鳴き声と違った。気持ち悪い感じがした。六時間目が始まりいつもと変わらぬ雰囲気だった。

ところが、「ゴゴゴゴ・ガタガタ」今までに経験した事のない音と揺れが、私達の体をつらぬいた。私は、先生の誘導に従いながら必死になって逃げた。何も考えられないほど、何が起きたのか頭の中が、真っ白になりながらもなんとか無事に高台へ避難することができた。そこには沢山の人がいた。

ふと海の方に目をやると水が引いて行く、びっくりしているところから、悲鳴と泣き声がしてきた。すると真っ黒な波が建物などをのみ込み私達が育った大船渡の町を音を立てながら破壊していった。私は家族の事を思い出した。兄は高台の学校だから、大丈夫だが、父と母の職場は海のそばにあった。私達家族は何かあったら「てんでんこ」で逃げることにしていた。「父と母なら絶対に大丈夫。」と自分に言い聞かせた。津波は一度だけでなく何度もおしよせた。

先生の指示で帰れる人は家に帰ることになった。私

の家は高台にあった。親に連絡がつかず、先生の許可をもらい友達の家の人に送ってもらった。家には、もうすでに兄がいた。兄の顔を見てすぐホッとした。しかし、父と母が、いつまでたっても帰ってこない。停電の中私達は待ち続けていた。夜になっても帰って来ず、ごはんも食わずに私達は寝ることにした。

しかし、布団に入っても全く眠れなかった。

なにか物音がしたので一階に行ってみると髪をボサボサにした父がいた。私はとびついて泣いた。そして父に母の事を聞いたが、何も分からないといわれた。でも私は母ならきっと大丈夫と思っていた。

しかし、三日たっても戻ってこなかった。私達は必死になってさがしたが、どの避難所にもみつからなかった。ついに遺体安置所をまわった。父が私達を呼び「よく聞け。」といった。母は津波にまきこまれ亡くなったのだった。私はすぐに涙が出なかった。頭の中で整理が起きなくなっていた。少し時間が立ち、台所で私は泣いた。涙と声がかれるほど泣いた。私は母に何もしてあげられなかった。いつも、言う事を聞かず、言い訳ばかりかしていた。私はすごく母に迷惑をかけてしまったと後悔していた。母は本当に優しい人だったと思う。私はそこで命の大切さ、母親の大切さが痛いほどわかった。「私は母を目標に人生を生きてい

く。」と、決意した。母のようになるのは、無理かもしれないけど少しでも母に近づけられるように私はたくさん努力した。友達と楽しい話をするときは、やさしく相手を思つて話した。「ありがとう」と、いう言葉を言われる回数が増え、すごくうれしかった。授業中は、静かに真剣にやった。成績が上がりました。先生にも、父にもほめられうれしかった。家では積極的に家事など自分から進んでやった。父がすごくうれしそうだったからよかった。

私が一番心がけてやったことは「笑顔」だ。母はいつも笑っていた。人はふしぎなもので誰かがいやな顔をする自分までいやな気持ちになったりするのだ。なので母は自分が楽しくなくてもできるかぎり笑っていたのだと思う。そして私は母を目指しながら高校へと進んだ。高校に入ってからすぐに沢山の友達ができた。それも、母がやっていた行動をまねして自分の性格が明るくなったからだと思う。

私はあの日の母の笑顔を忘れない。

二〇一〇年の年の暮れのことだった。小雪の散らつく夕方。母は、すごくうれしそうに家に帰ってきた。私は、何かあったのかを聞いた。そしたら、母は満面

の笑顔で「当たった。」といった。何が当たったのかよくわからなかったから、詳しく聞いた。それは、いつも母が仕事帰りに行くスーパー「マイヤ」での出来事だった。一週間くじ引きをやっていて母は炊飯器が欲しかったらしく食材をたくさん買ってそのくじを引いていたらしい。そこで母は炊飯器はあたらなかったが一等の家族旅行が当たり、よろこんでいた。場所はグアムだ。初めての海外旅行はとても楽しかった。私達家族はグアムに行った。グアムはみんな楽しそうにすごしていた。他の観光客も沢山いた。私のグアムでの一番の思い出は、海で泳いだことだ。私は母と一緒に行動した。すきとおった青い海でたくさん泳いだ。母と私は砂にうまってあそんだり、海水にもぐったりした。母はまるで子供にもどったように、はしゃいでいた。その様子を忘れられない。そして夕日がすみ、母と私はお互いの顔を見て笑った。一日で真っ赤にやけていたからだ。まるでゆでたまごのようだった。父と兄もサングラスのあとがわかるほどやけていた。グアムでの一番の思い出もあり、母との一番の思い出でもある。

高校を無事卒業し、仕事について。仕事は銀行員だ。母と同じ職についたのだ。銀行員はとても大変だった。それを母がこなしていたのはすごいと思った。

その後無事結婚し、子供も生まれた。家族をもってみて気付いたことがある。それは、自分のことより家族を優先させなければならぬということだ。何でも自分の事は後まわしにして子供のことを最優先しなければならぬのだ。母はそんなことも顔に出さず私を育ててくれたのだ。私は母のようにはなれないけど、何でも、完璧にこなしていてすごいと思った。私の母は自慢の母だ。母を目標に生活をしていたから、いい人になれたと思う。いままですごくいい人生を送ってこれたと思う。母に感謝している。「本当にありがとう。」ここまで育ててくれて。これからも精一杯生まれ育った町大船渡で生きていきます。

今は二〇三〇年。

夫の志音（しおん）は、三十歳、サラリーマン、私は二十六歳、銀行員。娘の海美（うみ）二歳。「ママ、ママ。」と私を追いかける毎日。笑い声の絶えない家族。「ワッハハハッ」

大船渡湾をのぞむ丘の上の小さな白い家。幸せな家族が住んでいる。

第 25 回

さんりく・おおふなとお話大賞審査委員

委員長 熊 谷 勵

委 員 下河原 シゲ子

委 員 長 澤 敏 之

委 員 村 上 洋 子

第 25 回

さんりく・おおふなとお話大賞入賞作品集

発 行 日 平成 28 年 1 月 8 日

編集・発行 大船渡市立中央公民館

〒022-0003

大船渡市盛町字内ノ目 4 番地 2

TEL 0192-26-3166

FAX 0192-26-5903

